

「ネコー」と啼いてしまつた。これも、あまりに一生懸命になつた結果かもしれない。

三

他事に心を奪はれて忘れるのは兎も角、何度注意して覚えようとしても忘れてしまふことも、私たちの屢々経験するところである。例へば、他人の名前などを覚えるとき、ある人の名は一度で覚えてしまふのに、他の人の名は、度々忘れてしまふ。加之、甚しい場合には今迄知己として交際し合つた人でも、ある機會以後はその名をどうも忘れ、するやうなことがある。かういふ種類の物忘れの心理を分析して見ると、その人がその名に對して、必ずある反感を抱いて居ることがわかるのである。

自分の心に向かぬことは、記憶の下積みになつて忘れ易いといふのが、最近、精神分析學の教へる所である。進化論の創唱者ダーウインは自分の説に矛盾する實例は、必ずこれを書きとめて置くことにして居た。何となれば、さういふ例は忘れ易いからである。ユングはこんな例を擧げて居る。甲といふ男がある女に戀したところ、女は甲をきらつて乙といふ男と結婚した。甲と乙とは滿更知らぬ間ではなく、商賣上の取引さへしたことがあるが、その以後、甲は乙の名を度々忘れ、手紙書くとき

など、乙の名を人にたづねるやうになつた。バーナード・ショウはその戯曲「シーザーとクレオパトラ」の中にエジプトへ來てクレオパトラをたづねたシーザーがローマへ歸りがけに、何かまだ忘れて居ることが、どうも思ひ出せぬことを書いて居る。その忘れたことといふのはクレオパトラに「左様なら」をいふことだつたのである。これによつてショウはシーザーがクレオパトラを、あまり意に介して居ないことを示さうとしたのである。雄略天皇は三輪川の水に物洗ふ女を御覽になつて御氣に入り、大宮に召し入れようと仰せになつたが、その後そのことを御忘れになつて八十年過ぎても遂に思ひ出したまはなかつたと傳へられて居る。して見ると、その女は、さほどひどく御氣に召さなかつたと拜察される。遊女高尾は「忘れねばこそ思ひ出さめ」と書いて評判になつたが、思ひ出さぬくらゐでは、そんなに殿様を慕つては居なかつたかもしれぬ。何となれば、「忘れねばこそ思ひ出さめ」とは正に記憶の下積みになつた有様をいふのである。

精神分析學の創唱者フロイドが、結婚後間もない夫婦に御馳走に招かれたとき、新婦は、新婚旅行から歸つて來て間もなく起つた笑話を物語つた。それは二人が歸宅した數日の後、新婦は姉と共に買物に出かけた。すると街のむかう側を偶然新郎がとほつたが、彼女はそれを見てうっかり良人である

ことを忘れ姉に向つて、「あら、何々さんが通つて行くから御覽なさい」といひ、姉に笑はれたといふのである。これをきいたフロイドは笑ふどころか、全身がひやりとした。果してその後間もなくその夫婦は離婚した。メーデルも、ある婦人が結婚の前日、式服を着て見る約束になつて居るのを忘れてしまひ、その後間もなく離婚した話を書いて居る。新婚旅行中にエンゲージ・リングを失ふなども、その夫婦がとも白髪まで續かぬ豫言となり得る。ドイツのある化学者は婚禮の日をうっかり忘れて、教會へ行かずに實驗室へ行つてしまつたが、彼はその後結婚といふことを断念して一生涯獨身で暮した。この化学者は自己を知るの明があつたといはねばならぬ。

これもまたフロイドの経験した話であるが、或青年がその細君と不和になつた。細君がある日買物に出た序に一冊の書物を買つて来て良人に與へた。ところが青年はその本をどこへ置き忘れたか、時思ひ出しては捜して見たがどうしても、見つからなかつた。あるとき、別居して居る青年の母が大病に罹り細君は介抱に行つたが、その介抱振りが如何にも深切であつたので、それを見て、青年は細君を急に好きになり、家へ歸つて何氣なしに札の抽斗をあけると、その中から例の書物がとび出して來た。實に嘘のやうな誠である。落語の「粗忽の使者」では、健忘な男が、尻をつめると忘れたこと

を思ひ出すことになつて居るが、人から貰つたものが見當らないやうな場合には、その人を心から好きになるに限るやうである。天若彦といふ神は天照大神の使として西國におくだりになつたが、大己貴の御いきほひにおそれ、下照姫の色にまよつて、つい、歸ることを御忘れになつたといふ話である。いや、かういふ物忘れは世の中に随分澤山あるやうである。

四

他人に借りたものを返すことも、兎角忘れ易いものである。これは人間に性來具はつて居る竊盜心理の發現であつて、聊かたちの悪い物忘れであるが、他人から貸してもらつたものに愛着を感じれば感ずる程、返すことを忘れ易い。ドイツのある婦人が義兄に當る有名な畫家とローマへ旅行した。畫家はローマ在住のドイツ人から非常に歓迎され、澤山の贈物を貰つた。その贈物の中に、古代の金メタルがあつたが、畫家はあまり喜ばなかつた。ところが同行の婦人が用が出来て歸宅して見ると、どうした譯か、間違へてその金メタルを行李の中へ入れて來て居たので早速手紙を出して、明日は送り返しますといつてやつたが、扱あくる日になつて見ると、どこへしまひ込んだかどうしても見つから

なかつた。その婦人は實はそのメタルが非常に欲しかつたのである。

他人から書籍を借りて、いつの間にかそれを取り切つてしまふ人は甚だ多い。精神病學者ステークルも、友人からダーウインの「表情論」を借り、度々催促されても、つい返すことを忘れ、あるときなどは机の上に「ダーウイン返済のこと」と書いて置き乍ら、その紙片さへも他のものゝ下積みにしたことを告白して居る。むかし、ある宿屋の亭主が、客に茗荷を食はせて荷物を置き忘れさせようと計つたが、どうしたことが客はすつかり荷物をかついで歸つて行つた。ところがあとで考へて見ると客は宿賃を拂ふことを忘れて行つたのである。この話は人口に膾炙せられて居るが、竊盜心理と物忘れとの關係をよくあらはして居ると思ふ。

「古今物忘れ」といふ書に次のやうな話がある。山にこもつた老人が、時たま下山しては、あふ人ごとくに、「唯何ごとも忘るゝぞよき」といつては嫌はれて居た。夏の頃ある人の家に宿つて、出かけに笠を忘れて行つたが、程なくして取りにかへつたので主人は「唯何ごとも忘るゝぞよき」とからかつた。すると老人は、「とはいへどあつきに笠は忘れめや」といつたので仕方なく笠を返してやつた。この話を友人に話すと、「さらば忘れは物によりてか」といつてやればよかつたのといはれたので、な

る程と思つてもはや後の祭であつた。ところが、冬になつたとき、山の老人が再び訪ねて來た。こんどは十日ばかり居ても少しも歸りさうにないので、主人はうるさがり、「山の庵が雪に埋まつてしまひますよ」といふと、老人は、「忘るゝはそれぞよろしき雪もしらで」といつて、平氣な顔をして居たので、主人は遂に怒つて「居るぞにくけれ忘れ顔して」といつて、たうとう追ひ出してしまつた。

西洋のある健忘な大學教授が、ある夜、他家へ招かれて御馳走になつたところ、他の客が皆歸つたのに教授一人いつまでも歸らないので、主婦は教授の注意を促がすために、「さよなら、もうおやすみなさいませ」といつた。すると教授は、

「おやもうお歸りになるのですか。今日は誠に貧弱極まる御馳走を出して相すみませんでした。どうか又お暇の節遊びに來て下さい」「貧弱極まる」とはよくも言つたり。さてもこの教授、招かれた人の家を奪ひとる下心であつたかもしれない。

知つた振り

泣きもせず泣く振りするを見て泣いて

泣かぬ振りする芝居見る人

といふ歌がある。これは芝居見る人の心理を巧みに言ひあらはしたものであるが、人間といふものは芝居を見るとときに限らず、悲しいときに悲しくない振りをしたり、嬉しくないときに嬉しい振りをしたり、知りもせぬことを知つたやうな振りをして、所謂心にもないことをしたがるものである。むかし聖人は喜怒哀樂の情を色にあらはさぬこと、換言すれば心にもないことをするのをえらい人間であるやうに教へたものであつて、いかにも、喜怒哀樂を色にあらはさぬ人は、ちよつとえらいやうに見えるものである。「伽羅先代萩」で、千松が政岡に向つて「お腹が空いてもひもじうは無い、何ともない」と言ひ放つと、見物は皆涙を流して感心する。極端な場合には、「武士は食ねど高楊枝」などといつて、何も楊枝をつかつてまで食つた風をする必要もないのに、昔の武士はかうした人を食つた欺瞞を敢てしたものらしい。昔から英雄豪傑などと言はれた人は、悲しい報知に接しても、怖ろしい目

に逢つても、平氣の平左衛門で、人はこれを「勇氣」と稱へて、賞めたゞへたものであるが、若しそれ等の英雄たちが、平氣の平左衛門を装つたゞけだとしたら、「勇氣」といふものは可なり變挺なものといつてよい。

何事によらず心にもないことを敢てする人は厭なものである。平素犬猿も音ならざる間柄であり乍ら、姑が死ぬと嫁は泣く。しかも心では少しも悲しくないのに泣くものがある。たしか源氏物語だつたと思ふが、姑の死に逢つた嫁が、體裁を繕らふために、茶碗に水を汲んで来て置いて、ひそかにその水で眼を濡らしては泣いて居たので、これを見て居た人が、こつそりその茶碗の中へ墨汁をまぜて置くと、さりととは知らぬ嫁は、熊のやうな顔をして人々をたまげさせたといふ話がある。何もそれ程にまでして悲しさを装はなくてもよさうであるのに、無理に、心にもないことをしやうとするからかうした滑稽を演じてしまふのである。尤も中には比較的垢抜けのした嫁もある。やはり姑の死んだ時の話であるが、その姑は生前、それは／＼意地が悪くて、嫁は、はたの見る目も可哀さうな程いぢめられて居たが、その嫁が姑の死に接して、ことさらに大聲をあけて泣きわめいた。その姿が、如何にも眞實に迫つて居て、決してつくり泣きでないから、人々は非常に感心したが、ある人がその嫁に

向つて、

「お前さん、姑に死なれたので悲しいのか。」ときくと、

「どう致しまして、このまゝ燃してしまふことになれば、それ程うれしいことはないですが、若しうっかり生きかへられた日には、どうなることかと、その時が思ひやられて、死骸のある内は、悲しくてならないので御座います。」と答へたので、質問した人も少々面喰つた。

支那の葬式、いや日本でも伊豆の大島あたりの葬式では「泣き女」といふものがあつて、悲しさうに泣いて景氣(?)をつける習慣があるが、心を静めて考へて見ると、聊か滑稽の感がないでもない。落語に「胡椒のくやみ」といふのがあつて、作り泣きをするために胡椒を頬張つて涙を出さうとすると、思ひも寄らず「くしやみ」が出てしまふ話があるが、とにかく作りごとといふものは「笑ひ」に終り易い。

二

だが、世の中には所謂「虚禮」なるものがあつて、感心せぬことでも感心したやうに見せかけ、を

かしくないことでも笑はねばならぬやうな場合が少くない。ことに人に使はれて居る人はさうした作りごとをせぬと、自分の首があぶなくなる。だから上長の人の御機嫌を取るために、御世辭の競争が始まつたりする。單に雇主と雇人との間ばかりでなく、人は到るところで、心にもないことをするやうに強ひられる。結婚式の披露に招かれた人は、さほどでもない新郎新婦を、秀才とか才媛とかと激賞しなければならぬ。二十五年勤続祝賀會などのときには、沈香もたかす屍も放らなかつた人を、さもく功勞があつたやうに嘯し立てねばならない。いやどうも苦しい世の中である。だがかうしたことは今の世の中に盛んに行はれつゝあるのであつて、従つて時には賞め過ぎたり祝ひ過ぎたりして反つて滑稽なことをしてしまふ。

むかし、人並はづれて物祝ひする侍があつた。あるとき梟が家の中へ飛び込んで來た夢を見て、不吉に思つて氣を腐らせて居ると、下役の某はそれをきいて、

「それは御目出度いことです、鬼は外くろは内といふではありませんか」と言つたので、その侍は大に喜んで、小袖を一重ね與へ遣した。すると、これを見た同じく下役の一人は自分も小袖がほしかつたので、元來智慧が足らなかつたけれど、こんど主人が不吉な夢の話をしたら、大に祝つてやらう

と待ちかまへて居ると、ある日主人は、

「ゆうべは厭な夢を見た。俺の頭が落ちる夢だつた」と不快さうに語つた。その男はこゝぞとばかり、
「それはお目出度いことです。それこそ正夢正夢」と言ひ放つた。

かうした物忌みや物祝ひに關する笑話は昔から随分澤山あつて、落語の「七福神」などその代表的
のものであるが、言葉のつかひ方一つで吉ともなり不吉ともなることであり乍ら、先方から、心にも
ない御上手を云はれて喜ぶのが人情の常であるかと思ふと、人間といふものはよほど御目出度く出来
て居ると言つてよい。

三

心にもないことを装ふうちでも、殊更いやなものは「知つた振り」である。とかく人間は「知つた
振り」をしたがるものであるといふことを古への聖賢も見抜いて居たと見えて、「知らざるを知らずと
す、これ知れるなり」といふ格言さへ出来て居る。この格言が若し何人にも實行されて居たならば世
の中はよほど暮しよくなるであらうとさへ思はれる。「きいて當座の恥、きかで末代の恥」といふ諺の

あるのも「知つた振り」のしたい人間の心を誡めたものと言ふことが出来よう。子供の時代には知ら
ぬことばかりだから盛んに質問するが、年を取るに従つて、知らぬことをも知つて居るやうな振りを
したがる。ことに多少の地位を得た人は、自分より下なものに向つて知らないことを知つたやうに装
ふものが少くない。

ある出家が武士の風をして馬に乗つて遊行したところ、道に、赤漆で塗つたやうなものが落ちて居
たので小姓に拾はせたところ、小姓はそれを渡し乍ら、

「これは伊勢海老で御座います。」といつた。
すると出家は、

「なに、伊勢海老だといふことは自分もよく知つて居たが、この朱のさしやうが一寸珍らしいと思つ
たから、拾つて貰つたのぢや。」と言つた。

伊勢海老ではまたこんな話もある。伊勢の國へ一度も行つたことがなくて、何度も參宮をしたやう
に言ふものがあつたのである人が、

「そんなに度々伊勢へ行かれたのなら、定めし伊勢海老を澤山見られたでせう？」ときくと、

「見ましたとも、宮川で澤山見ましたよ。色が赤いから實に見事でした。」

「そりやをかしい。海老は海のもので、實際は青黒いものです。煮ると初めて赤うなりますが、それにしては宮川は河だのに、河で赤い海老を見たとはどうも嘘らしいですが。」

「いや、あなたは随分世間が狭いですな。物好きな男がありましたね、海老を川へ放したんですよ。それがいつのことだか御存じありませんまいがな。」

何でも知つて居るやうな男は、たゞ生かぢりであるといふだけで、その實何も知らない。然し、人間といふものは、その生かぢりを頻りにやりたがる。先年アインシュタインが來朝して、「相對性原理」といふ言葉が流行したとき、平素物理学の「ぶ」の字も顧みなかつた人たちが争つて相對性原理に關する書物を買ひ求め、わかりもしないのに、わかつた振りをするものが少なくなつた。するとアインシュタインは、「物理学にさのみ興味を持たないで、相對性原理にだけ興味を持つとは不思議ですなあ。」と、賞めたのやら嘲つたのやらわからぬやうな皮肉な言葉を殘して去つた。世界で十何人しかわからぬといはれて居る原理が、日本の有象無象にわからう筈はない。その當時、相對性原理を、男女相對の原理と解釋して、ひそかに買つて見てびつくりした女學生もあつたといふことであるが、かうした

人の方が、相對性原理を生かぢりして居る人よりも罪がなくてよい。

四

人に物をきかれて知らぬと答へるのは可なりつらいことであるが、知らぬことを知つて居るやうに答へたときよりも、あとではるかに氣持のよいものである。若しこちらの知らぬことが先方にわかつたならば、こんど知つて居ることをきかれて答へても、先方はもはや信用してくれない。反對に、こちらが人に物をきいたとき、知つて居ることは知つて居る、知らぬことは知らぬとはつきり答へてくると、少くともその人の知つて居ることに就ては信用が出来ると同時に、知らぬと答へられても、その人を尊敬する氣にこそなれ、輕蔑する念は少しも起らぬものである。

知らぬことを知つて居るやうに誤魔化して居る人は、先から先へ人を欺いて行かねばならぬためにその方にエネルギーが注がれて眞の知識を得るひまがなくなるといふ恐ろしい破目に陥り易い。實際「知らぬ」と答へるには可成り勇氣が要る。然し一旦その習慣をつけさえすれば譯もなく實行の出来ることである。

人間の頭脳には限りがある。どんな賢い人でも、自分の専門以外のことにはうとくなるのがあたり前である。だから知らぬのは當然のことである。若し何でも知つて居る人があればその人の知識は間違ひだらけの浅いもので眞の知識とはいひ難い。

むかし、人の物語をよく聞いて覚え、洛中洛外知らぬ所はないと吹聴する男があつた。ある人が、「あなたは嵯峨法輪寺を見ましたか」ときくと、

「見ましたとも、いかい大ひけでしたよ」とその男は答へた。

又、同じく京都邊のことならば何一つ知らぬことはない、世の中の物知りは、白河を夜舟に乗つたといふ類ひだ。自分ほどよく知つて居るものは外にあるまい。と自慢をする男があつた。ある人が、「さても美しいことです。ではおたづねしますが、祇園と清水との間はどれ程の遠さでせうか？」ときくと、その男は扇に書いた繪をひろげ、「さうですね、一寸ほどです。」と答へた。

地圖を見ただけで世界を知つて居るやうに見せたり、解剖の圖を見て、人體の内部を見たやうな振りをする人も、この扇に書いた繪で京見物をした男と同じ類ひである。有名な天文學者ガリレオは書

物ばかり読んで物事を知つた振りをする男を、紙上哲學者ペーパーフィロソファーといつて嘲けたが、かうした紙上哲學者は、世間一般ばかりでなく、學界にも可なりに澤山あるやうである。私たちは須らく生きた學問をして、知つたことが益々少なくなるやうに工夫しなければならぬ。即ち知らぬことが多くなればなる程研究心が盛んになつて知識らしい知識が得られるからである。

五

知つた振りは厭なものだか、知らぬ振りはある場合には奥床しい。「能ある鷹は爪をかくす」といふ、「大賢は愚なるが如し」といふ言葉はこの邊の消息を傳へたものであらう。貝原益軒が乗合船の中で知らぬ振りをして居たことは美談として今に傳へられて居る。フランスの大數學者ラグランジュは、人と話をするとき、いつも *Je ne sais pas* (僕は何も知らぬが) といふ前置きをするのが常であつた。ゲーテの書いたファウスト博士は、自分の知らぬことを人に教へねばならぬ苦痛を指摘して居るが、若し何人でも、自分が知つたつもりで居る事柄を、果して知つて居るかどうかと考へて見たならば、實は、何も知つて居ないのに驚くであらう。だから賢い人は、強ち知らぬ振りをするのではなくて、

平素よく反省をして、自分が何も知らぬことを自覺するために、あぶない氣がして口へ出さぬのだと解釋する方が適當であるかもしれない。知つた振りをするものは、自分の知識に就て考へて見たことがないから、所謂盲目蛇に怖ぢずの類で、人前憚らず自慢するのであらう。だから賢者の知らぬ振りは、本當の知らぬ振りではないかもしれない。

本當の意味の知らぬ振り、即ち知つて居らねばならぬのに知らぬ振りをするのは、知つた振りと同じく、いやなものである。さういふ人間にあふと氣味が悪くなる。犯罪探偵の際などは、知つて居りながら知らぬ振りをされるために、探偵たちがどれ程苦心するか知れない。尤も知つて居ることを知つて居ると正直に言つてしまへば、時には自分の生命がなくなるから、知らぬ存ぜぬを強情に繰り返すのである。そして知らぬ振りをするものに知つて居ると言はせるためには、古來、拷問などといふ恐ろしい方法さへ案出され應用されたのである。かうなると知らぬ振りといふことも中々の大問題である。

いづれにしても知らぬことを知らぬ、知つて居ることを知つて居ると言つて世渡りをして行くほど氣持のよいことはない。安_レ分_レ以_レ養_レ福、緩_レ胃_レ以_レ養_レ氣、省_レ費_レ以_レ養_レ財、とは東坡の三養の教へであつ

て、「分に安んず」とは即ち、あるべき様に振舞ふことを意味するのである。とかく分に過ぎたことをしやうとすると恥が多い。實に、知つた振りをしなければならぬ人ほど、不幸な人は世の中にあるまゝと思ふ。

水中の屁こき學者

一

學問は萬人のための學問であつて、學者のための學問ではない。ところが日本の學者の中には、自から高く構へて學術の殿堂の中にとちこもり、民衆と接觸するのを恥のやうに心得て居るやうな人が少くない。通俗雜誌に筆を執れば俗學者と嘲り、民衆向きの著述をするとブック・メーカーなどと罵る。これは實に歎くべき傾向といはねばならぬ。

むかし服部中庸は、國學者平田篤胤が、それまで學者の獨占となつて居た國學を、普く民衆に知ら

しめた事業を賞めた言葉の中に、「學者は物を善く覚え候ばかりにては何の役にも相立たず候、その學問を天下に廣め申さず候ては、實に水中の屁こき學者と申すものにて候」と、民衆を相手にすること
を潔しとしない學者を痛罵して居るが、現代にも兎角この「水中の屁こき學者」が少くないやうであ
るから、私はこゝでこの語の意義を明かにして置きたいと思ふ。

柳樽に、

すかしても音のするのは河童の屁

といふ句がある。河童は水の中に棲む動物だから、すかし屁を放つてもぶく／＼と音がする。
尤も、「花暦八笑人」の著者に言はせると、河童の屁といふ言葉は、説語に「子曰くこつばの火」とあ
る言葉の間ちがひださうだが、なるほど河童といふ動物は、中學校の動物教科書にも説明してなかつ
たやうである。言海にも、「水陸兩棲動物ニテ、形、三四歳ノ童ノ如ク、面、虎ニ似テ身ニ鱗甲アリ、
九州ノ山中ノ溪流ニ多シト云、詳ナラズ」とあるところを見ると、著者大槻文彦氏は河童を目撃され
たことはないらしい。が、河童の穿鑿は兎に角、人間でも水の中で屁を放れば、音をたてぬ譯にはゆ
かない。物事にはよく例外があるけれど、いくら學者の屁でも、この原則に従はずには置かぬ。なほ

又、平賀源内が、「放屁論」の中に論じて居るやうに、「それ熟々惟みれば、人は小天地なれば、天地に
雷あり、人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し、時に徹るこそ持まへなれ」といふのだか
ら、屁をひらぬ學者といふものも滅多にないであらう。して見ると「水中の屁こき學者」とは、常
に「ぶく／＼」を伴つて居る學者といふ意味であつて、ぶく／＼を英語になほすと、Book Bookであ
る。従つて書物の中に埋まつて、物を覚えることばかりに熱中し、世間と没交渉になつて居る學者を
「ブック、ブック學者」即ち、「水中の屁こき學者」といふのである。

いや、私はとんでもない解釋をしてしまつた。こんなふは／＼したことを書いて居ると、「空中の糞
こき學者」とでも罵られると悪いから、文字の解釋はこれ位にして、さて、靜に考へて見るに、學者
が、自分で會得した知識を一般民衆にわかるやうに發表しないのは、むしろ、あまりに民衆を馬鹿に
した態度であると謂はねばならぬ。尤も近頃は學問の専門化が極端になつて、自分より外には興味も
なければ知識もないといふやうな枝葉の問題が研究されて居るから、民衆に知らせたくても知らせ甲
斐がないといふ羽目に陥つて居る學者も少くない。かうした學界の傾向も、つまりは、學者たちが學
問は世のため人のためにするものだといふことを辨へて居ないからである。かくて、學者はだん／＼世

間から遠つて行き、學問も民衆と没交渉にならうとする。このことは、かの、金のあるものが高等の教育を受け易くて、金のないものが學問をしにくいといふ現象と等しく、悲しむべき極みである。

かういふ異常な現象は、わが國に於てことに著しいやうに思はれる。何も外國を真似るばかりが藝でないけれど、よいことは須らく真似をすべきである。ダーウインの創唱した進化論もハックスレーのやうな學者が出て、その才筆を揮つて民衆のために祖述したから、あれ程早く一般に知れ渡つたのである。研究に没頭する學者も無論必要であるが、それを民衆に祖述する學者も、なほ必要である。一人にして兩方を兼ねて居たらそれに越したことはなく、英國の物理學者チンダルや、ドイツの物理學者マツハは、この兩方を兼ねて居た人である。

二

然し乍ら民衆に知らしめるに當つて、徒らに難解な文章を以てするのは、民衆に反つて有難迷惑である。むかし日本の學者は多く、漢文で著述をした。ドイツでも、學術上の研究報告に際して、ラテン語の使用された時代があるが、その時代には、研究の進歩が非常に遅かつたために、そこに氣附い

て、自國語で發表することにしたら、研究は目ざましい進歩をした。日本では現今でも、外國語で書いた論文の方が、和文で書いたものよりも數等有難がられて居る。だから、日本文で書くにしても、平易な文章を書くことを、さも／＼自己の估券にかゝはるとでも思つて居るかのやうに、所謂佶屈贅牙な難解の文章を綴る人がある。文章は達意を旨とするのであるから、一般の人が読んでわからなくては何にもならない。明治の先輩、福澤諭吉先生は、この點に非常に苦心され、文章を發表する際には、いろ／＼の人に聞いてもらつて、一人でもわからぬといへば、わかる迄字句を訂正されたといふことである。

嘗て私が某雜誌に哲學的な論文を連載したところ、一讀者から、「何が何だかさつぱりわからぬ」といふ投書が編輯者の許に届いたので、驚いて執筆を中止したことがある。何が何だかわからぬ文章を雜誌に載せるほど不經濟なことではない。書く勞力も損、讀む勞力も損、誌面も損だからである。自分が書きたいことを書きさへすれば、讀者にはわからうとわかるまいとかまはぬといふ態度を私は好ましく思はない。他人に意味の通じないやうな文章ならば、それこそ河童の尻にも及ばない。

むかし一休和尚在世のとき、ある人が畫家の土佐守に繪を書いて貰はうと思つて訪ねると、折ふし

土佐守は晝寐をして居た。懇意な仲であつたから、その人は土佐守を揺り起して、すぐ様書いてくれと頼んだ。すると土佐守は、今ねむたいから今晚書かうと断つたが、その人はどうしても肯き入れず無理に筆と紙とをあてがつたので、土佐守もやむを得ず、一筆ふるつてその人に渡し、再び寝てしまつた。その人は喜んで家に持ちかへり、さて、どんな繪かを見ると、水の中に丸いものが書いてあるだけで、何が何だかさつぱりわからない。早速土佐守のところへ使者を出して、何を書いてくれたかと問ひ合せると、土佐守は暫くその繪を眺めて居たが、自分にもよくわからないと返事した。そこでその人は、書いた本人にわからぬやうなものは仕方がないと思つて破つてしまはうとしたが、ふと一休和尚に讀をしてもらはうといふ考が浮び、大徳寺へやつて來た。一休はその繪を見て、自分にも何だかわからぬが、御望みなら讀をしようと言つて、

「水中に物あり、その一の物を問へば、かきし畫工も知らず、持主も知らず、讀する我は猶しらず」と書き放つた。これは繪の話であるけれど、讀む人にわからぬやうな文章は、書いた人にもわからないのではあるまいか。

深遠な學理を平易な文章で、誰にもわかるやうに書くほど六ヶ敷いことはない。平易な文章を綴る

には、秀でた文才の外に豊富な常識が要る。ところが、動もすると、學者は常識のない方が却つてあたりまへであるかのやうに誤つて考へて居る人がある。厨川白村先生の言葉をかりるならば、兎角、學者間には常識コンモンセンスが斥けられて、専門センスに主きが置かれて居る。だから日露戦争を知らなかつたやうな解剖學者が出るのである。なる程、かやうな人の學術に熱心なことは賞讃すべきであらうが、惜い哉、その人の學問は生きた學問でなくて、死んだ學問である、え、何？解剖學は本來死んだ人間の學問だつて？洒落てはいけないよ。

三

「水中の屁こき學者」と共に「文字藝者」もいやなものである。文字藝者とは、一口に言へば道德心の缺乏した學者をいふのである。例へば他人に道を説いて自分だけ不道德勝手次第の人をいふのである。かう書いて來ると、私自身を省みて何だかかうペンを持つ指の先がくすぐつたくなつたけれど、書きかけたから書いてしまはう。

「文字藝者」といふ言葉は石田勘平の「都鄙問答」に出て居るのである。今そのうちの「學者の行狀

心得難きを問ふ段」の一節を、現代語にかへて左に引用して見よう。

問。ある所に若い時から學問して四書五經は勿論どんな書物をも暗誦出来る位の人がありますが、どうも不審なことには、金を借りてもかへさず、両親を虐待し、自分は物知り顔をして人から嫌はれて居ります。博學でありながら、かやうに身持の悪いのはどういふ質問をするのです。その學者は徳を得るために學問をしたのでないから、文字藝者といふのです。

答。あなたは徳といふことを御存じないから、さういふ質問をするのです。その學者は徳を得るために學問をしたのでないから、文字藝者といふのです。

問。すると、書物を読む外に學問といふことが御座いますか。

答。いかにも學問は書物を読むことですが、書を読んで、書の心を知らなければ學問とは言へません。聖人の書には心が含まれてあります。その心を知るのが學問です。で、文字ばかり知つて居るのは一藝ですから、文字藝者といふのです——

なる程かう説明されて見ると、文字藝者は天下に少くない。昔から天才と稱せられる人の中には、随分勝手放題な不徳徳をする人があつた。ロンブローソの「天才論」を読めば、その例は澤山にある。そしてある場合にはその人の事業が偉大なために、少しばかりの道徳上の缺點は、見のがしてやつて

もよいやうに思はれる程の人がないのもなかつた。けれど、かやうな人は要するに例外であつて、眞に尊敬すべき偉大な學者は、昔でも今でも學徳兼ね備へた人である。

ところが近ごろ、水中の屁こき學者と共に文字藝者も可なりに殖えて來た。自分さへよければ他人はどうでもよいといふやうな人が澤山出來た。師弟の情誼は徹履のやうに見做され、他人が學術上の新発見でもすると、それにケチをつけたがり、甚しい場合には、他人の考を盗んで研究を行ひ、自分の手柄にしようとするものさへある。そして又、自分の出來ぬことを棚へ上げて、他人の仕事をかき下すにつとめて居る。民衆向きの書物を書くのを俗學者などと嘲る輩の中には、時として、自分で書けぬひがみから、無闇に悪口をいふものがないでもない。

四

「文字藝者」の極端なものになると、自分の利益のために、未熟な研究を民衆に發表して、それで金を儲けようとするものがある。かうなると民衆は有難迷惑どころか、正真正銘の迷惑を受ける。こんな學者こそ學術の殿堂に閉ぢこもつて居てくれた方がよい。否むしろ、殿堂の壁の中へでも塗りこめ

た方が世の中のためである。自己の利益のために民衆を犠牲にする學者を通常「學商」と呼んで居るが、これを「水中の屁こき學者」流に呼ぶならばさしづめ、「殿中の寢小便學者」とでもいふべきであらう。而も、御本人は世の中を甘く見つもつて、たま／＼攻撃されても、「蛙の面に小便」と受け流して酒蛙々々して居る。いやどちらにしても小便に縁があつて、鼻持がならない。

チンダルが英國の二大物理學者デーヴィとファラデーの師弟關係を述べた文章の中に、この二人の尊敬すべき點は、その研究の結果を賣り物にしなかつたことだと言つて居る。この二人の研究こそは實に堂々たるもので、金にしようと思へばいくらでも金を儲けることが出来たのであるが、二人は少しもそれを欲しなかつた。

然るに、難治の病に悩んで居る患者の弱點に乗じ、效きもしない新藥を發見したと吹聴して血の出るやうな患者の金を搾つたり、效力のない手術を吹聴して老人などの懐を軽くしてやつたりすることは、何といふ不料簡であらうか。かうなると、「寢小便」どころではなく、「殿中の双傷學者」といふ方が至當であらう。何となれば、その罪はまさに切腹に價して居るからである。學理を民衆に理解させることは頗る困難だが、學理を以て民衆を欺くことは極めて容易である。科學萬能の今の世の中で

は、「科學」といふ魔法の劍をひらめかせて民衆に向へば、民衆は一も二もなくその魔法にかゝつてしまふ。

「晝夜用心記」にこんな話がある。浪人が金に窮したあけく、日頃出入する家に黄金の獅子の香爐のあることをきいて、二三日拜借を願ひ、それを以て、ある金持のところへ行き、これは私の家に傳はる眞鍮の香爐ですが買つて下さいませんかと言つた。先方の人を見ると正しく黄金である。つぶしにしても三百兩のものだが、持主は眞鍮だといつて居るから、やすく買へるだらうと思つて値をきいて見ると、百兩でよろしいといふ。それからだん／＼談判して結局七十五兩なら買ふと答へた。するとその浪人は御幸町通りの細工人の所へ行き、重みから形から寸分のちがひなき眞鍮の香爐を作らせ、出来上つた後、それを以て、金持のところへ行き、七十五兩を受取つた。後に金持は偽物と知つて浪人をせめたが、「はじめから眞鍮だといつたではありませんか」との言葉に、そのまゝ泣寐入りになつてしまつた。

科學は正にこの黄金の香爐にたとふべきものである。その黄金の色に迷はされて、民衆は時として眞鍮の香爐を握らされる。誠に用心すべきことではないか。

知識遊戯

先ごろ「籠の鳥」といふ唄が大へん流行して、瑞穂の國の有象無象が、籠の中のカナリヤのやうに囀り散らし、たうとう關東の大地震を惹き起すに至つた——譯ではなかつたが、兎に角けしからぬ現象であるといつて、その筋から禁止の御觸れが出てしまつた。世の中の大ていのことは流行り出すときりのないもので、例へば昨今歐米では、クロスワード・パズル（はめ字の謎）といふ知識遊戯が、素晴らしい勢で流行しつゝある。クロスワード・パズルとは、碁盤の目のやうに區切つた四角の中に、適當なアルファベットの文字を嵌めて、別に示された鍵の意味と一致させるといふ、「籠の鳥」などよりは遙に上品な遊戯である。單に碁盤の目のやうなものばかりでなく、圓盤を仕切つたものもあるが、その原理は、鍵に示された言葉の意味を考へて、適當な文字を嵌めるに外ならない。米國では各大學で對抗競技をさへ行ひ、各雑誌は争つて懸賞募集をやつて居るが、あんまり、みんなが熱中して、三度の食事を忘れ、睡眠時間をつぶして考へる爲に、クロスワード・パズルが兒童の心身に及ぼす影響バズ

を研究し始めた學者のある位である。何事にも世界一を誇りたがるヤンキー先生はクロワード・ルを解く力も世界一になりたいと思つて居るのかもしれない。一旦緩急あつたとき義勇公に奉ずるの精神が磨り減らされやしないかと考へて居る餘裕のないほど、彼地の老幼男女はこれに夢中になつて居るらしい。が、それも無理はなく、このクロスワード・パズルは知識遊戯として可なり面白いもので、これに似たものはすでに昔から存在して居たのであるが、時好に投じたといふものか、つひに昨今に至つて甚しい流行を來したのである。最近日本にも翻案されて懸賞募集をやつて居る雑誌もあるが、恐らく今後日本でも相當に流行するだらうと思はれる。

クロスワード・パズルに限らず「判じもの」だとか「謎々」だとかは昔から人々の心を引きつけずに置かなかつた。平凡な言葉でも謎をかけて話すと相手の注意を喚び起すものである。又、口へ出してはつきり言ひ難いやうなとき、謎の言葉をつかふと、至極圓滑に聞え且つ相手の注意を促がし、時には、露骨に言ふよりも遙に多くの感動を先方に與へることが出来る。日本に發達した和歌は古來屢屢この目的のために使はれた。いかにも、天子様が梅がほしいと仰しやつたとき、「どうも惜しいですが」と答へるより、

救なればいともかしこし驚の

宿はと問はゞいかゞ答へん

といった方が、どれだけ効果が多いか知れない。だから紀貫之は古今集の序に、「力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らけ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」と書いて居るが、和歌にこのやうな力が若しあるとすれば、その一部分は和歌の持つて居る「謎」の魅力だといつてよいかもしれない。本来人間の「謎を解きたがる心」は非常に強烈であつて、自然科学が今日のやうに偉大な發達を遂げたのも、見やうによつては、人々が「謎を解きたがる心」を満足せしめやうとした努力の賜といつても敢て過言ではなからうと思ふ。近時探偵小説が盛んに讀まれるやうになつたのも、この特種な心を満すためであつて、探偵小説は要するに、「謎を解きたがる心」の糧として存する文學である。探偵小説の全盛を極めて居る英國米國に前記クロスワード・パズルの大流行を來したのも、決して偶然ではないのである。

西洋でも東洋でも、謎々や謎語は随分古くからあつたのである。かのギリシャ神話の中には有名なスフィンクスの謎がある、シープスといふ國の王ライオスは、かつて、その子のために殺されるとい

ふ箴言を受けたゆゑに、王妃ジョーカस्ताと別居して居たが、ある時酒にしたゝか酔つて王妃に接し王妃は孕んで一子を生んだ。ライオスは驚いて後悔したけれども及ばず、王妃に命じて、生れた兒を殺させた。けれども王妃は可愛い我子を殺すに忍びなかつたので、奴隸に命じて山中へ棄てさせたのである。するとコリンス王ポリバスの配下の牧夫が、棄兒を見つけて王城に連れ歸ると、王妃ペリベアは子がなかつたために、エヂボスと名けて我子とした。このエヂボスが後にスフィンクスの謎を解いた男である。エヂボスは生れつき聰明で文武百般に秀でたために、同族の青年は羨望のあまり彼に向つて王の實子でないことを告げた。エヂボスは驚いて母にきくと、母は何事も語らないので、デルファイへ赴いて巫女にはかると、「家に歸るな、歸ると父を殺して母と結婚することになる」といふ箴言を得た。彼は愈々驚いて、その足でベオチアの方へ走つたが、途中で實父ライオスと衝突し、互に父子と知らず、エヂボスはライオスを殺した。ライオスの横死後王妃ジョーカस्ताの兄クリオンがシープス國を支配することになつたが、その時國內にスフィンクスといふ怪物があらはれて、逢ふ人毎に「謎」をかけ、若しそれを解けば自分が死ぬ、解かねば殺すといつても、誰もその謎を解くものがなかつたため、随分澤山の人を殺した。そこで、支配者クリオンは謎を解いたものを王とし

且前王の妃ジョーカスタを與へると言ひ觸らした。

このことがエヂボスの耳に入るや、彼は進んでスフィンクスの居るところへやつて來た。この怪物は、頭は女に似、體は狗に似、尾は蛇に似、爪は獅子のやうで、且翼があつた。スフィンクスはエヂボスの姿を見るや、「朝は四本の脚で歩み、午は二脚で歩み、夕は三脚で歩む動物は何か」ときいた。するとエヂボスは「それは人間である。生れて間もないときは手足で匍ひ、中年には二脚で立ち、老人になると杖を用ゐるからである。」と答へた。これをきいたスフィンクスは、谷に身を投じて死んだ。

それからエヂボスは王位に上り、母とは知らずジョーカスタを妃として二男二女を生ませた。間もなく國中に疫病が流行つたので、デルファイに赴いて神慮を伺ふと、先王を殺したものを追放しなければ疫病は息まぬとのことであつた。そこでエヂボスは、先王の殺害者を捜させたが、その結果、殺害者が自分自身であること、及び自分は生みの母と結婚したことがわかり、母のジョーカスタは恥かしさに自害し、自分は兩眼をくりぬいて盲人となつた。そして末の娘アンチゴネの肩にすがりつ、シ―プスを立ち出でて流浪の旅にのほり、幾程もなく大地の中に吸はれて死んだ。――これが所謂「エヂボスの悲劇」である。讀者の中にはスフィンクスの謎ぐらゐる、立ち所に解ける人が少くないであら

う。試みに、知人にでもこの謎をかけてやつて御覽なさい。但し、先方が立ち所に解いて、その結果エヂボスのやうに兩眼を失はれても、私は責任を負ひません。……

この悲劇では、必ずしも、スフィンクスの謎が、その中核となつて居るとは言へぬかもしれぬが、これによつて大凡そ、謎といふものが、昔から如何に人々の心を動かしたかを知ることが出来る。

「閑田耕筆」にも、「謎語といふもの、やまと唐土も古へより聞ゆ。絶妙好辭を謎字にせる如し。こゝに柏原の瓦全記なるもの有り、をかしければあぐ」として次の一節をかゝけて居る。

「あたり近きに、ある宮がたの古女房の住みておはしけるが、雨夜につれ々なるに、なぞく／＼などかけて興じたまふ。椿葉落ちて露となるとかけて、雪と解く、椿葉落ちてとは、はの言を除くなり、露となるとはつばきのつをゆに置きかふるなり、さてゆきとはなりぬ云々」

これによつて見ても、今日行はれて居る謎々は相當古くからあつたものらしく、人間が謎に興味を持つことは今も昔も變りないと言つてよい。

人間には謎を解きたがる心があると同じに、他人に謎を解かして見たがる心がある。而も六ヶ敷い謎を提出して他人の困るのを見て喜ぶといふ意地わるい心もたつぷりある。よく探偵小説には、謎の

遺言状を書いて財産のありかを示すなどといふ事件が取り扱はれてあるが、かうしたことは實際にもその例が少くないらしい。中には財産も何も無いのに、六ヶ敷い謎々を書き遺して、あとに残つたものを散々に悩まさうとするやうな酔興人がないでもない。「鎌倉比事」に次のやうな話がある。鎌倉松ヶ岡の庄に法橋道智といふ名醫があつた。年七十餘で歿したが、臨終の時、澤山の弟子どもを枕もとへ呼んで所持の金銀財寶をわかち與へた。たゞ家傳の醫書の箱一つだけは、誰にも譲らないで、蓋をかたくしてその上に一文字を引き、委細は譲り状に書いてあるから、死後に開いて見よと遺言し、譲り状として烏の羽を一枚づつ渡して死んだ。弟子たちは醫書がほしかつたけれど、烏の羽一枚づつでは何が何だか譯がわからず、たうとう最明寺殿へ訴へて御工夫を願つた。最明寺殿は箱を御覽になつて、「錠がない所を見ると、この一文字が謎である。一文字は、打てば開くといふ意味だから、箱をたたいて見るがよい。」と仰せになり、臣下のものにたゞかせになると、果して箱は四方に開いた。ところが、箱の中はからつほだつたので弟子たちは太息をついてかしくまつて居た。そこで最明寺殿は弟子たちの持つて居る烏の羽を御取上げになり、臣下に命じて、飯の上で蒸さしめになると、その上にありありと文字があらはれた。で、その文字を読み合せると、「醫の術は偏をきらふ、仲景は外感に妙

なり、東垣は内傷を得たり、河澗は火病を論じ、丹溪は濕熱に偏なり、薛己は陽虛になづむ、是に偏らずして中立せよ。」となつた。弟子たちは今更乍ら、師の遺訓が身に沁みて、有難く御前を退いたのである。

いや、作り話ではあるけれど、手数のかゝつた遺言もあればあるものである。尤も、手数がかゝればこそ、遺訓に有難味がついた譯であつて、すべて何事でも勿體づけようと思へば、他人に容易にわからぬ手段を講ずるに限る。こんなことは私が申し上げなくても、皆さん先刻御承知の筈、例へば英語や、ドイツ語をまぜて話して御覽なさい。忽ちえらい人だと思はれますから。

謎を解きたがる心は即ち祕密をあばきたがる心であるが、人間は他人の祕密をあばきたがると同時に、一方に於て自己の祕密を他人にあばかれまいと希ふものである。こゝに於てか、自分又は自分の仲間だけに意味がわかつて他人にわからない謎即ち「暗號」なるものが工夫された。西洋ではギリシヤ時代に、スパルタの將軍たちの間に一種の暗號通信法が試みられ、既にジュリアス・シーザーに至つて、近代的な暗號通信法が工夫された位である。暗號については書いて見たいことが澤山あるけれど、それは又別の機會に譲つて、最後に私は謎々の解き方に關して一寸述べて置かうと思ふ。

謎を解くには所謂頓智がなくてはならない。數學の問題とちがひ、公式とか定理とかある譯のものでないから、全く臨機應變の機智によらねばならない。この點が、數學などよりも餘計に智力の増進に役に立ちはずまいか。現今の學校では、正式に謎々の解き方などを教へて居る所はないやうであるが、出来ることなら、謎々や暗號を解讀させたらどうかと私は思ふのである。前記のクロスワード・パズルが、兒童の智力をどれ程増進させるものか、そのうちに米國あたりから、何等かの報告があるであらうが、クロスワード・パズルに限らず、一般に知識遊戯といふものは、恰度體力を養ふに各種の遊戯の必要なのと同じやうに、智力を養ふに缺くべからざるものだらうと私は思ふ。それにもかゝらず、通常の遊戯ほど一般に顧みられては居ないやうである。この點に於て私は、自分が好きだから言ふ譯ではないが、探偵小説を知力養成の文學として大方の諸君に推奨したのである。

さて、謎の解き方のことであるが、それについて私は、頓智の最もよく發達した人として有名な一休和尚の言葉を挙げたいと思ふ。あるとき、一休のところへ四五人の若者が來て、そのうちの一人が「きのふ一條の札の辻の門柱に不思議な書付がはつてありましたが、私たちがどう考へてもわからぬので、和尚さまに教へてもらひに來ました」といひ乍ら、懷中から、その書付のうつしを出した、見

ると、

鼻

鬼の酒器

歌の讀習

新社

お足の袋

はしり船

原をひく

興行仕り候。すなはち番附は、

上見ればしろく樂しむ春霞、鍋からすぐに物よそふなり。年寄りには齒ぐきで梅をくらひけり、花鳥風月始終まつたし。十づつを十と千づつ十合せ、まあというては返されにけり。

と書かれてある。和尚はこれを見て忽ちにつこり笑ひ、これは「能」の番附である、鼻とは口上、鬼の酒器はきたる、歌の讀習は廿日、新社は今宮、お足の袋はおたび、走り船はおいて、原をひくはのうである。番組は、「上見れば云々」が白樂天、「鍋から云々」が敦盛、「年よりは云々」が軒端梅、「花鳥云々」が花月、「十づつ云々」が百萬、「まあと云々」が海士であると判讀した。若者たちは舌を巻いて驚いたが、一休は、「こんな謎は何でもない」といひ、更に、

「しかれども謎は、總じて案じ付けんのなくては解かれぬものなり、是も、この興行仕り候と書いたるが、此謎のとけ口、是から氣附いて、扱は能か角力かとさう心が付くと、いなや、白う楽しくと

は白樂天、鍋からすぐにはム、敦盛などと、早速と解るものよ、これ判じ物の奥の手、皆若ければただ今傳授しおくなり。」

と言つた。この言葉は誠に謎を解くの奥の手即ち祕術である。即ち謎を解くには、その謎のとけ口を發見するのが第一に必要な條件であつて、犯罪探偵の際にも、この第一の手がかりを捜し出すことが最も大切である。「人間萬事を一つの謎と見做すとき、その謎を巧みに解いて行く人は、畢竟、とけ口をうまく見つけ出した人といふことが出来ると思ふ。知識の詰め込みに急で、智力の養成がおろそかにされ易い時節に當つて、お互に、知識遊戯に就て、眞面目な考察をして見ることは強ち徒勞ではあるまいと思ふ。

探偵小説の味

—

私は若い時分から探偵小説が大好きであつた。他人の作を読むことも好きなら近頃では自分も作つて見るほどに好きになつた。現今、歐米各國に於ける探偵小説の流行は實に素晴らしいもので、ことに英米兩國では、探偵小説専門の雑誌が澤山發行され、その他の通俗雑誌も探偵小説を載せぬのは少くないからである。日本でも最近探偵小説の同好者が激増したやうであるから、この際一人でも同好者を殖したいために、こゝに探偵小説の味について書いて見ることにした。

さて、自分が大好きなものであるからといつて、これを誰にもすすめるといふことは必ずしも當を得て居ない。「耳袋」の中には、こんな話がある。享保の頃、御先手を勤めて居た鈴木伊兵衛といふ人は生れつき百合の花が嫌ひであつた。ある時茶會で四五人集まつたとき、吸物が出て皆々箸を取つたが、どうした譯か伊兵衛一人は、甚だ顔色が悪く、箸を取らなかつたので、様子をたづねると、伊兵衛は、吸物の中に百合の根でもはひつては居ませんかと言つた。伊兵衛の百合嫌ひなことは會主の方でも承知だつたので、もとより吸物へ入れるやうなことはなかつた。で、よくよく調べて見ると、一座の膳に百合の花が書いてあつたので、さてはと驚いて膳を取りかへると、伊兵衛は頗る元氣になつて、吸物に口を附けた。

今昔物語にも「猫嫌ひ」の話がある。今は昔、大藏丞より冠をたまはりて、藤原清廉といへるものありき、大藏太夫となん云ひし、それが前世には鼠にてやありけん、いみじく猫をなん恐ぢける、さればこの清廉が行き至る所々には、若き男どもの勇みたるは、清廉を看付けければ、猫を取り出でて見すれば、清廉猫をだに見つれば、いみじき大切の用事にて行きたる所なれども、顔を塞ぎて逃げ去りぬ、されば世の人、この清廉をば猫恐ぢの太夫とぞ付けたる云々」とあるが、西洋でも、猫の嫌ひな人は随分あつて、ウエリントン、ナポレオン、ロバーツの三將軍は揃ひも揃つて「猫恐ぢの太夫」であつた。

このやうに、普通の人に可愛がられる百合の花や猫も、ある人にとつては極端にきらはれるのである。それ故、自分が好きなものだからといつて、これを人にすゝめるといふことは當を得て居ないのである。私が今、何故に百合の花嫌ひと猫嫌ひの例を挙げたかといふに、實は、探偵小説の持つ怪奇味が、花でいふならば鬼百合の花、動物でいふならば黒猫の持つ怪奇味に比較すべきものであるからである。従つて、讀者の中に若し百合や猫の嫌ひな人があつたならば、その人にはことによると、探偵小説も氣に入らないかもしれない。

だが、世の中には食べず嫌ひの人がある。又、一二度食べて見て、本當の味がわからなかつたゝめに、その後手をつけないで居る人もある。さういふ人に向つて私は探偵小説の持つ特種の味を傳へて見たいと思ふのである。尤も、物の味は主觀的に判断されるだけであるから、私の感じた味と他の人の感ずる味とは必ずしも同一ではない。また私の味覺が特に發達して居る譯でもなく、むかしモンターヌスは一口食つて英國の牡蠣か否かを識別したといふことであるが、私の探偵小説を識別する味覺はモンターヌスどころか、モン外漢に少し毛の生えた位のものだから、私の感じた探偵小説の味が、必ずしも探偵小説の本當の味だとはいへないので、この點は豫め覺悟しておいて頂きたいと思ふ。

二

前章に、「知識遊戯」と題して、人間が如何に「謎」を解きたがるものであるかを述べたが、探偵小説は、一口にいふと、この「謎を解きたがる心」を満足させてくれる文學なのである。普通の文學が「情」に糧を與へるものであるならば、探偵小説は「智」に糧を與へるものだといふことが出來よう。尤も、かう言つたからとて、探偵小説が「情」と沒交渉であるといふ意味に解釋されては大へん

である。「智」の欲望を満足させるだけならば、物理学や数学で十分であるかもしれない。智を働かせつゝ（作者と共に）謎の事件を解決し、情の満足を得るところに探偵小説の妙味があるのである。数学の問題や前回に述べたクロスワード・パズルを解いた々々でも私たちは一種のいふに言へぬ満足を得るのであるから、事件の解決によつて、悪人が罰せられたり、善人の冤罪が雪がれたりするのはこの上もない愉快を感じるものである。而も、その事件の解決は、少くも天の助けを借りずに、人間の智慧、即ち探偵の機智と推理とだけによつて爲し遂げられるのであるから愈々以て痛快である。数学の問題は公式があるから、多くの場合推理の力だけで解決されるが、人間世界に起つた謎に就ては、別に公式といふものがないのであるから、其處に探偵に従事するものゝ「機智」を必要とし、これがまた、読む者に何ともいへぬ興味を與へるのである。

江戸時代の探偵小説ともいふべき「鎌倉比事」に、「善悪の入替」と題する次の一章がある。

「泰時朝臣徳政を行ふといへども、天のなす處にして、此間飢饉打續き、民百姓困窮に及びぬ。是によつて、徳政の訴へ度々なり。泰時公も是非なくして望のごとく國中徳政の御ふれなされける。其頃鎌倉旅籠屋に旅人の一宿して居たりしが、其家の亭主、御徳政のこと知らぬ體にて、旅人にいふや

う、宿の法にて候あひだ、荷物脇差此方へ渡し給へとて、あづかり置ぬ。其夜に鐘をつき、太鼓をうち、鈴の音天地にひびき、御徳政とぞ呼はりける。宿の亭主旅人に向つて、かりそめに預かりたる脇差荷物にて候へども、國の法にはそむき申されず、笑止千萬と申しける。旅人力なく泰時朝臣の御前に出で、右の段々を申上れば、やがて宿の亭主を召し、その方旅人が脇差荷物を徳政するとあり。この義は力なき事、旅人も一夜借りたる宿を返すなとて、宿の亭主を追出し、其家を旅人にぞ下されける。」

この話は「醒睡笑」の中にある、板倉伊賀守の取扱つた事件の話を焼き直したものらしいが、怨の深い宿屋の亭主が、旅人の荷物を預つて、徳政のおふれが出たから返さでもいゝといつて横取りすると、それぢや旅人も借りたる宿屋を我ものにするがよいと判決した機智は、まことに痛快ではないか。探偵小説の第一の味は、探偵の機智によつて受けるかやうな痛快味である。

三

探偵小説とは、必ずしも犯罪又は犯罪探偵を取り扱つたものゝみを言ふのでないけれど、探偵小説

の名の示すがごとく、やはり犯罪とその探偵を取扱つたものが一ばん多い。探偵事件を取扱つたものが餘計に書かれるのは言ふ迄もなく、一般の人々が犯罪又はその探偵といふことに興味を持つからである。

さて然らば、何故に人間は、犯罪に興味を持つであらうか。これには色々の理由があるけれども、要するに私たち各自の心にかくされて居る犯罪性に一種の満足を與へるからである。原始時代に於ては、文明人の所謂「犯罪者」が人々から尊敬され崇拜されたものである。だから、現今に於ても、大犯罪者は人に憎まれるといふよりも、寧ろ尊敬されるやうな傾向がないでもない。鼠小僧の墓に香華が絶えなかつたり、フランスの大犯罪者ラスネールが監獄に居たとき、國中の男女から色々の贈物が山ほど届いたといふ話も、故なきにあらずである。六人斬や七人斬の事件が突發すると、どの新聞もその貴重な紙面の大部分を割いて面白可笑しく報道する。巨盜や殺人犯の經歷が、芝居に仕組まれたり、小説に書かれたりするのは、單に勸善懲惡のためのみではないのである。

人間には犯罪本能があると同時に、また復讐の本能がある。罪を犯したものが、逮捕されないで居ると、一刻もはやく探し出して貰ひたいと思ふ。迷宮に入つた事件が新聞に出ると大ていの讀者は、

それ／＼犯人について自分自身の説を建てたがるものである。而して、探偵小説は、實にこの犯罪本能と復讐本能とに異様の満足を與へてくれるものである。

犯罪本能のうち、詐欺は竊盜の本能とちがつて、智慧を働かせねばならぬだけに、竊盜よりも、一層文明的である。従つて文明人にとつては、詐欺の話は竊盜の話よりも、一層興味が深いのである。支那の杜鵑新書や、日本の晝夜用心記を読んで、案を叩いて「面白！」といふ人は澤山あつても、中にかゝれてある詐欺師の行爲をにくむ人は割合に少ないであらうと思ふ。「晝夜用心記」の中に、「思ひの外の御能筆」として、次の話がある。

「西國大名の使者男、駕籠よりおりて兩替店に立ちより、金子五百兩、銀にて買ひ申すべし。畏つて小判吟味を遂げ、相場おさだまりの通りに極り、さて某事は且那年忌につき御當地大徳寺へ使者に罷上り、則ち此金子施物に持參仕るなり。包みやう立派に上書も序でながら頼みたきよし、手代共うけ給はり、日記づけは仕れども、かやうなる書付は終に致したる義なしといふを、是非とも無心とあれば黙止がたく、しからば先づ書仕り見申すべしと、二三人の手代二行三行宛書き並べたる中へ、此使者男も戯れて書いて見るに、各別能書と見えて手代みな／＼恥しく、中々御自身あそばされ候へ、

最前より悪筆共、御笑草の種々を蒔筆の、扱ばなれいたさぬ我等と、墨摺りて擬へば、物の見事に認め、持たせ来る銀箱の蓋をとらせ、百兩代の銀を取出せといへば、若黨相心得、五百目包を四つ五つ取出すを、それ待てと自身包みの封印、箱の書付を吟味するに、此銀箱兩替する箱の印にあらず、扱扱兎相なる下役人共なり。急いで伏見の屋敷へ持歸り、笹田徳右衛門に申すべきは、此箱拙者拂方の銀子と取替り申せば、京の字の箱を取りかへ給はるべしと、早く歸り銀箱此所迄持參仕れと、無興顔に申しつければ、始め取出したる五百目包を箱へ入れざまに、包ませたる金子百兩も同じく取りまぜて入れければ、兎相千萬なる男、それは銀子相わたさねば、此方の金子にあらず、兎忽なる奴と、目に角を立て叱られ、其まゝ金子は取出し、箱を持たせ伏見へ急ぎけり。跡にて金子は兩替屋の手代へ相渡し、時刻うつれば拙者は柴野へ參るなり、只今申付けたる銀子追付持參申すべければ、相違なきやうに請取り、其百兩急いで寺へ持つて參れと、言ひつけ給はるべしとて、又駕籠に打乗つて上をさして行くと見えしが、伏見よりの銀子其日の暮るゝにも持つて來らず、明くる日も沙汰なく、三日までは待てど暮せど音なければ、今は毎日はたらく小判なればと、包みを解いて見れば、みな偽小判なり。いづれもあきれはて、是は不思議とよくく分別すれば、かの箱へ入れたるを、しかられて取出

すとき、取かへけるなり。上書同筆なれば、氣の付かぬやうに、元よりたくみしを、今漸う合點か。何と巧妙な詐欺ではないか。兩替屋の人々は詐欺師の行爲をにくむよりも、先づその詭計の巧さに感心したにちがひない。

探偵小説の筋は、大てい、讀者を巧に欺くやうに組立てられてある。實際事件の解決が意外であればある程、その探偵小説は面白いのであつて、讀者は作者にまんまと詐されて、却つて愉快を感じるものである。言葉をかへて言ふならば、探偵小説そのものが一つの大きなすつほかしてあり、皮肉であり、諧謔である。即ち、一口噺に於て感ずる痛快味のスケールを、ぐつと大きくしたものが、探偵小説の一つの味である。

四

次に探偵小説には、凄味と怪奇味とがある。この二つの味は物質文明の中毒を緩和するところの、清涼劑である。自然科学の發達によつて、怪奇の世界は外見上段々滅つて行かうとする。幽霊も追々少くなり、狐も跋扈しなくなつた。けれど我々の心の一隅には、物に恐れ、不思議の前に額づく、原

始人類時代の心が蠕つて居る。自然科学が発達した反動として、心靈現象の研究が行はれたり、神祕主義が頭を上げて來たのも、色々の理由があるけれど、凄味と怪奇味とを要求する近代人の心のあらはれと解釋することが出來ないでもない。そして探偵小説なるものは、その近代人の心の渴を満たしめるために生れたものと言つても決して過言ではないのである。

探偵小説ではないけれども一八四八年パリイ発行のシャルビニオン著「マグネチズムの生理學醫學及び形而上學」に次の話が書かれてある。ガリチアのラードチウイル伯爵は、孤兒となつた姪を引きとつて養女とした。伯爵の居城は古風な建物で、伯爵の居室と子供室とは大きな廣間で隔てられ、あちらこちら往來するには、どうしてもその廣間を通らねばならなかつた。若しその廣間を通らなければ庭へ出て戶外を歩くより外はなかつた。姪のアグネスが伯爵の養女となつたのは六歳の時であつたが彼女は、その廣間をとほる度毎にいつも大聲をあけて驚き顔をかへた。といふのは、その廣間の扉の上にギリシャ神話の中のシビルの繪の額がかけられてあつたからで、どうした譯か彼女は、この繪を怖れその後凡そ十年ばかりの間は雨の日も雪の日も、庭をとほつて往來した。そのうちに彼女は養子を迎へることになり、結婚披露が花々しく伯爵の居城で行はれた。その夕方、彼女は大いにはしやぎ、大

ぜいの男女の客に圍まれて、思ひ切つて廣間へはひつて見たが、忽ち顔色をかへて逃げ出さうとした。之を見た人々は、冗談半分に彼女を廣間へ押しこめて扉の鍵をかけると、彼女は悲鳴をあけて扉をゆすぶつたが、その途端にシビルの繪の額が落ちて來て彼女は腦天を打ち碎かれて即死した。

これは事實であるけれども、何となく凄味に満ちて居る。探偵小説家の元祖と言はれて居るエドガー・アラン・ポオの小説にはかやうな凄味が極度にあらはれて居て、科學で捏ね上げられた私たちの頭は譯もなく引きつけられてしまふのである。なほ私は探偵小説の歴史についても述べるつもりだつたがそれは他日に譲つて置く。

怪奇と主觀

一

題は馬鹿にかたくるしく聞えるけれど、要は、この世の不思議の大部分は、人間の心で拵らへあけ

るものだといふことを述べたいのである。夏になると怪談が多く流行るから、かうした題目を選んで、怪談の多くも、やはり、主観的なものだといふことを話さうと思ふのである。

靈驗とか、物の怪とか、人間の主観から生れるものだといふことは、昔でも讀者の、とつくに知つて居たところである。それにも拘はらず、現今でも各種の迷信が盛んに行はれ、「鯛の頭も信心から」といふことを口で言ふ人は澤山あつても、心からそれを感じて居る人は甚だ少いのである。その證據には、何か不思議なことに出逢ふと、口ではそれを一笑に附して居ながら、心では少なからぬ恐怖と好奇とを感じて居るものが決して少くないのである。尤も人間には、とかく怪奇を好む性質があつて、恐ろしいものには却つて近よりたがる場合もあるから、怪談その他に關する迷信は人類の存在と共に存在するであらうが、時には人間のさうした弱點につけこんで、悪事を働くものが出るから、注意しなければならぬのである。

むかし支那のあるところで、一人の農夫が、自分の田で一疋の「くじか」(鹿の一種)を見つけた。早速家にかへり、附近の人と共に捕りに戻つて來ると、「くじか」は居ないで、干した魚が一疋、田の中に轉がつて居た。扱も不思議！これは定めし神様の仕業にちがひないと、農夫はそれを持ち歸つて

祭つたところ、人々はそのことを聞き傳へて參詣し、或は病の平癒を祈り、或は福運の到來を禱つたが、靈驗頗るあらたかであつた爲、後には大きな宮を建て、數十人の巫女を雇ひ入れることになつたので、數百里の遠きに聞えて遙々參詣するものが引きもきらぬといふ有様となつた。ところがある日、參詣に來た一人の商人が、神體を拜んで、

「なーんだ。この干魚は、いつか「くじか」を捕らせて貰つた代に俺が田の中へほつて置いたものだ。」といひ乍ら堂に上つて、取り捨てゝしまつた。即ち、この商人は、農夫が「くじか」を見つけて隣人を誘ひに行つて居る留守の間に、朋輩たちと車を引いて通りあはせ、「くじか」を載せて去り、その代りに干魚を残していつたのである。

さて、肝心の干魚がなくなると、それから後は、一向靈驗もなく、その宮はまたよく間にさびれてしまつた。

何事によらず、珍しいものは不思議な力を持つて居るものである。むかし、朝鮮人參が、萬病藥として用ゐられ、起死回生の效を奏したのは、つまりは、人參が高價で、珍しいものだったからである。かの、ツベルクリンが、その發見の當初に、不思議に肺病を治すことが出來たのは、その發見

者がコツホ先生であるのと、その製造の原料が結核菌そのものだから頗る珍しかったがためである。即ちツベルクリン注射で結核のなほつたのは、ツベルクリンそのものゝ力ではなくて、注射を受ける患者の、ツベルクリンに對する信仰の力が強かつたためである。言ひ換へて見るならば、ツベルクリンの注射を受ければ必ず治ると信じた患者自身の心が、肺病を治したのである。實際、私は、肺病は心の持ち方一つで治るものだと思つて居るのであつて、色々な奇薬や靈術でなほつたといふ例の多いのは、當然のことである。いかに奇薬だと吹聴されても、それを飲むものに、その奇薬に對する絶對の信仰がなかつたならば、決して病氣はなほるものでなく、小麦の粉でも、治ると信じて飲んだならば、立派に病は治るものである。だから肺病の薬を賣つて一儲けして見たいと思ふならば、須らく、その薬は、普通の人の聞いたこともない南洋の何々島で、これ〴〵といふ僧侶が三七二十一日間某といふ地にある洞穴にこもつて夢の御告げで知つた、何々といふ名木から取つたものだと思つて、その値段をべらぼうに高くして、然る後れい〴〵しく、〴〵けあひ薬」と銘を打つべきである。さうすれば醫者でさへうけあひ兼ねる肺病を見事にうけあつてくれるのだから、これくらゐ心強いことはなると、患者は隨喜の涙を流しあとで首く〴〵つてもかまはぬからと、借金を質に置いて貪り買ふことう

けあひである。うけあひ薬の本當の意味は、けだし、「買ふことうけあひ」といふことである。

二

漢文の本に「風聲鶴唳に驚く」といふ言葉のあることを讀者諸君はよく心得て居られるだらうと思ふ。強敵を前に控へて怖れ氣のついて居る兵士たちは、風の音や鶴のなき聲をも敵兵の襲來ではないかとき〴〵ちがへて、びく〴〵する。むかし平家の軍勢が、富士川の陣で、水鳥の羽音を敵軍の攻め寄せて來た音と早合點し、周章狼狽の極を盡し、醜名を千載に流した話は誰も知つて居るが、すべて物音といふものは聞く人の心によつて色々な意味にとれるものである。試みに夜分、人々が寐靜つてかち、柱時計のこち〴〵といふ音に耳を澄ますならば、こちらの思ふやうな意味に聞えることを誰しも経験するであらう。先日私の友人の醫師が比叡山に登つて、はじめてホト、ギスをきいた話をしたので、私が、「どうです。子規のなき聲はやはりテツペンカケタカと聞えたですか。」ときくと、その醫師は、「ヘンタウセンエン(扁桃腺炎)」と聞えたと言つた。なるほどこれは醫者らしいき〴〵方だと私は頗る面白く思つた。むかし和州の菩提山に、忠寛正信坊といふ人があつたが、この人は大へんよく眠

る人で、人々は「眠の正信」といふ綽名をつけた。ある夜、彼は鶏がないたのを、寢耳に「チウカーン」と御所から御よびになつたときいて、あわただしく御前へかけつけると、御前は不審に思つて、「どうしたのだ。」と御たづねになつた。

「お呼びになつたので参りました。」

「呼びはしないよ。」

すると、その時忠寛は、鶏の聲のする方を指して、

「あのとほり忠寛と御呼びになりました。」と眞面目な顔をして答へたので、御前は吹き出して御笑ひになつた。

「醒睡笑」にも次のやうな語がある。

「有馬の湯に入りける者、宿主とかたるついでに、鶏ははねおとをばたくとして、トツテカウと鳴くといふは、まことかやといふ者ありしに、宿主、いやとよ、ありまの鶏は、一向よそのとかはりて、元日の曉より歳のくれの夜あけまで、はおとをかさくとして、カツケカウと鳴くなりとぞ。身を思ふから道なき事を。」

三

夢もまたこれと同様であつて、心に深く刻まれて居ることが、睡眠中に受けた感覺を機縁としてあらはれる場合が少くない。深く希望したり、はげしく恐怖したりして居ることがあると、ともすればそれが夢となつてあらはれ易いのである。金を澤山持つて居る人は金を盗まれやしないかと怖れて居るが故に、強盜などに襲はれる夢を見易いのである。コーペンハーゲン大學の心理學教授レーマン博士は、その著「迷信と魔法」の中に、次のやうな實話を引用して居る。ある富豪が、ある夜、寢床へはひつて書物を読んで居たところ、いつの間にかうとくとした。すると數人の強盜かしのび込んで來て、手にくピストルをさゝけて彼の方へ近づいて來たが、やがてその一人が、どんと一發射ちはなした。はつと思つて富豪がとび起ると、枕許に置いてあつたランプがひつくりかへつて床の上にごほれた石油が燃えかけて居たので、驚いてそれを消しとめた。即ち、その富豪は、睡眠中ランプの落ちる音をきいたのであつた。それをきいて意識を恢復する迄に強盜がはひつて來て彼をおどしつけるところを夢に見たのである。いふ迄もなく、彼は平素、強盜を恐れて居るので、ランプの落ちる音を

ピストルの音ときちがへ、音が聞えてから眼のさめる迄の數秒時間の間に、それだけの夢を見た譯である。多くの夢はこの例の如く睡眠中に受けた感覺の錯誤から遡つて形成せられるのであるが、それが、事件を先に見て、それからその感覺の錯誤が起つたやうに思ひ誤られるのである。

又、人を殺したものが、殺された犠牲者を夢に見易いことは、昔から良心の苛責と稱せられて居るけれど、これも畢竟罪の發覺を怖れるために、さうした夢を見るのだといつて差支ないであらう。殺人者が、被害者の亡靈に惱まされることは、「四谷怪談」などの例を引く迄もなく讀者諸君のよく知つて居られる所であるが、かやうな亡靈は、畢竟、殺人者自身の心で造りあけるものに過ぎない。

むかしある人がその細君を失つた。ところが、細君の幽靈が每晚出るのでその人は大に困つて色々な祈禱をしてもらつたけれど、少しもその効果がなかつた。困じ果てた後、ある日彼は一人の道士をたづねて、その譯を話すと、道士はその時碁を打つて居たが、碁石を一にぎりその男に握らせ、

『今夜幽靈が來たら、これは何だとたづねて見なさい、返答が出來なければ、もう出なくなるから。又若し返答したら、黒い石か白い石かをたづねて見るがよい。』と教へてやつた。

その夜、いつもの如く幽靈が來たので、碁石をにぎつて、

「これは何だ。」とたづねた。

「碁石。」

「白か黒か。」

「黒。」

男はびつくりして、道士のもとにかけつけ、幽靈が立派に返答したことをつけると、道士はにこりと笑つて、

「さうだと思つた。それぢや、すぐ引きかへして、幽靈に、碁石の數がいくつあるかたづねて見なさい、きつと答へにつまるから。若し答へにつまつたらこの碁石を投げつけてやるがよい。さうすれば二度と出ないから。」と教へた。男は早速歸つて幽靈に向ひ、

「數はいくつだ？」とたづねた。

「……………」

ぱつと男が幽靈めがけて碁石を投げつけると、その姿はかき消すごとくになつたが、それ以後幽靈はふつゝり來ないやうになつた、男が道士に向つて、幽靈の來なくなつた理由をたづねると、道

士は、

「何事でも、自分が知つて居ることは幽霊も知つて居るのだ。碁石の数は、あんたか知らないから幽霊も知らず、従つて出なくなつたんだ」と言つた。

この説明が果して合理的であるかどうかはわからぬけれど、妖怪といふものが、見る人の主観と關係があるといふ譬喩話としては頗る當を得たものであると思ふ。

四

何か悪いことをしたあけくに、病氣にでもかゝると、よく、それを神佛の「祟」であると考へ、神佛に祈禱をしなければ治らぬやうに思ひ、又、實際、さうしない限り病氣の長びくことのあるのは、悪いことをしたといふ意識が、身體の治癒力を妨害するがためである。むかし、豊前の小倉の城内に一つの小さい祠があつた。何の神といふことはわからなかつたけれど、城主は、現在の地が穢れ多いから、城外の清淨な地を選んで、之を移さうとした。すると俄かに眼病を患つたので、周囲の者は、きつと、その神の祟にちがひないから、移しになつてはいけませんと諫めた。これをきいた城主は大

に怒り、「穢らはしい土地から清淨な地へ移さうとするのに祟りをするやうな神なら、それは邪神にちがひない。邪神なれば少しも恐るゝに足らない。」といつて、急いでその祠をこはし、城外で焚いてしまつたところ、眼病も日ならずしてなほつてしまつた。「病は氣から」といふ言葉は、言ひ古されては居るが、精神作用の肉體に及ぼす影響は、想像以上に甚だしいものである。ある若い夫人は毎日三十七度二三分の熱が出るので、肺を冒されたと思ひこみ、段々食欲もなくなり遂には床につくやうになつた。で、ある日、思ひきつて醫師に診て貰ふと、醫師は携へて來た検温器で夫人の熱をはかつたが不思議にも平熱であつた。ところが夫人の持つて居る検温器ではかると、三十七度を越したのでこれはと思つてよく調べて見ると、夫人の持つて居る検温器そのものが狂つて居るのだとわかつた。即ち夫人は無熱だつたのを、検温器のために有熱と思ひこみ、氣病みをしたのである。このことを知つた夫人はその場から氣分が爽快になり、忽ち食欲が出て、一二日過ぎには、もとの健康状態にかへつた。又、ある學生は夏期休暇中、海岸へ避暑に行つたが、ある日、道で痰を吐くと赤いものが出たので、その夜から、がっかりして床にいたが、ふと、その日に西瓜を食つたことを思ひ出し、赤いものが西瓜だつたと氣附くと、忽ち氣分が晴れやかになつて、海へはひつて心ゆくまゝ泳いだ。むかし、漢

の時代に、汲の令といふ人が、杜といふ人に訪ねられて、共に酒を酌みかはしたところ、杜の持った杯に蛇の影がうつたのを杜はこらへて飲んで歸つたが、その夜から、胸が張りさけるやうで、色々療養に手を盡したけれど効果がなかつた。このことを傳へ聞いた令は、杜を見舞つて盃の話をきき、それは多分、長押にかけてあつた弩が蛇のやうに見えたにちがひないと判断し、無理に杜をわが家につれて来て、先日と同じところに坐らせ、杯に酒をくんで渡すと、果して、弩が蛇の形にうつつた。すると杜は忽ち氣分を恢復して、その日から大病は癒えてしまつた。

かうした例はまだ、數へ切れぬほどあるが、かくの如く人間は自分の心で色々な怪奇をつくつてそれに怖れたり、惱んだりする場合が少くないから、お互に用心しなければならぬのである。

心 靈 界 の 奇 現 象

—

心靈現象の研究は、最近歐米各國で盛んに行はれるやうになつた。ことに英國では物理學者のオリヴァー・ロッチを始め、探偵小説家として名高いコーナン・ドイルなどが大に力を入れて居るのであるが、何分、一面に於て、心靈現象を眞似た色々の詐欺を行ふものが多いので、この方面の研究は甚だ進歩が遅いのである。ことに心靈現象は、現今の自然科学の法則で説明することが困難であるため、自然科学を尊重する人たちは、頭から心靈現象を否定しようといふ傾向があつて、愈々その研究の進歩を阻止され易いのである。

幽霊の有無は昔から随分澤山の人によつて議論された所である。幽霊を見ない人はその存在を否定し、幽霊を見た人はその存在を肯定する。然し乍ら、嚴密に言へば、多數の人の見ないものが、必ずしも「存在しない」とは限らず、又、人間の眼に見えるものが必ずしも「存在して居る」とは限らないのである。人間の眼といふものは、健康な人でも錯誤を起し易いが、ことに精神又は身體に異常があるときには、錯覺、幻覺を起し易いからである。けれど、從來多くの人によつて認められ、記載せられた幽霊の悉くを、錯覺、幻覺のために起つたものだと簡單に説明してしまふのは、やはり早計であるといはねばならない。何となればこの世の中には自然科学の法則で説明の出來ぬことが、數へ切れ

ぬ程澤山あるからである。自然科学なるものは通常事物のあらはす現象を説明するに役立つだけであつて、事物の本態を説明するのは多くの場合不可能である。例へば自然科学がもつとく、發達したならば、生物の組織と寸分もちがはぬものを人造することが出来るやうになるかもしれないが、たとひさういふものが出来ても、必ずしもそのものから「生命」が躍り出すとは限らないであらうと思ふ。かの鶏の卵について考へて見ても、その内部の構造はどれもこれも殆んどちがはないにもかゝらず、受精した卵からは雛が出来、受精して居ない卵からは雛が生れない。其處に生命の神祕があり不可思議があるのである。尤も下等生物の受精といふことは必ずしも精蟲の働きを要せず、精蟲の代りに、化學的物質を以てしても、ある場合に受精の現象は起るのであるが、それを直ちに高等の生物に當はめて考へることは早計であつて、何れにしても、生命の神祕は、自然科学の容易に窺ひ知るべからざるものである。

話は少し、わき道へそれたが、心靈現象の多くは、要するに自然科学的知識を以てしては説明のつかぬものである。説明のつかぬ代りに、それ丈けまた聞いて興味のあるものである。だから、私はこれからその不思議な心靈現象について書いて見ようと思ふが、短い紙面のことであるから、以下主として「蟲の知らせ」と、「死の豫兆」とについて述べようと思ふのである。

二

「蟲の知らせ」とは血族の者や親友が死んだり又はその身に異變が起つたことを、遠隔の地に居て知ることをいふのであつてこれは色々な形式で行はれるものである。

先づ一番多いのは、「夢見」である。大正十一年八月二十六日軍艦新高が遭難したとき、變死した乗組員の家族や親戚のもので「蟲の知らせ」を得たものが少くなかつた。Mといふ海軍少佐の實兄は、二十七日の拂曉、少佐が軍服姿で、人なつかしげに、にこ／＼し乍ら立つて居る夢を見て、起きてからその話を二人の妹にすると、その二人の妹も、各々同時に少佐の夢を見、但し一方の方は、少佐が顔面に打撲傷を受けて居る姿を夢に見た。又、少佐の夫人と愛兒とは別の所に住んで居たが、二十六日の夜、三歳になる少佐の愛兒は、夢を見て頻りに喋舌り出し、そのうちに、「お父さんがお土産を澤山持つて歸るよ」とはつきり言つた。(この外にも『新高』の乗組員の遺族で、夢による「蟲の知らせ」を得たものは少くないが、委しいことの知りたい人は、雑誌「心靈研究」、創刊號(大正十二年七

月一日發行)を参照して頂きたい。

ウィーンの神経病學者ステークル博士も、その著「夢の言葉」の中に、同じやうな「蟲の知らせ」の例を書いて居る。それは博士の母の経験した所であつて、ある朝、母は博士に向つて、「ゆうべはIの叔父さんの夢を見ました。十年間一日も思ひ出さなかつたのに、突然その叔父さんが亡くなつた夢でした。」と語つた。すると果してその翌日、トリエストの伯父さんの遺族から手紙が届いて、博士の母堂が夢を見たその同じ夜に、伯父さんが亡くなつた旨が記されてあつた。

ある場合には、「蟲の知らせ」が、物の「破壊」によつて行はれることがある。即ち、靜かに置いてあつたものが突然ひつくりかへつて破れたり、落ちて來さうもないものが落ちてきて微塵に砕けたりするのがこれである。西洋でも、日本でも、かやうなことは昔から『不吉』な豫兆とされて居て、必ずしも人の「死」に關したことがかりでなく、その他の事變の前兆とも考へられて居る。芝居でやる丸橋忠彌の召捕の場で、忠彌の持つた杯が突然二つに割れるところがあるが、あゝいふことは實際にも度々起ることであるらしい。やはり、軍艦新高で死んだS一等兵曹の遺族の話であるが、S夫人が八月二十七日の朝、室の掃除して居ると、觸りもしないのに、水差の蓋が突然疊の上に轉がり落ちて

その蓋の頭がもけてしまつた。夫人がそれを非常に氣味悪く思つて居ると、三十日に良人の死の通知が届いた。

一八五九年に發行されたドイツのシレジア新聞(第一七五號)にも次の話が載つて居る。四月十二日ブレスラウ市のある會社員の一家が夕飯をたべて居ると、食堂にかけてあつた「クックター時計」の分銅と鎖とが、突然床の上に落ち、而も鎖の鏝がばらばらになつて、あたりに飛び散つた。すると、果して、午後十時に、その家に電報が届いて、主人の兄弟が卒中で死んだ旨を知らせて來た食堂の時計は、七時三十五分で止つて居たが、後にきいて見ると、死んだ時間も、やはり七時三十五分だつたとの事である。

かやうな「蟲の知らせ」を偶然の暗合と解釋したり、又は、夢の場合などは記憶の錯誤即ち、死の通知があつてから見た夢を、その以前に見たやうに思ひちがへるのであるといつて説明する人もないではないが、私は一概にさういふ説明には賛成しかねるのである。レーウエンフェルドのやうな神経學者も、この現象を認めて居るのであつて、その著「催眠術」の中には、「蟲の知らせ」の可能なることを論じ、「人の精神作用が遠く他人に傳達するためには、比較的永く續く精神の興奮、就中思考の凝

集、又は異常な精神状態にあることを要し、受感者（即ち蟲の知らせを受けるもの）は、催眠状態にあることを要する」といつて居る。これを平易な言葉でいふならば、人が死ぬやうな時には、異常な精神状態になるのであるから、その精神に起された一種の興奮が恰も電波のやうに、無心の状態に居る先方の人又は眠つて居る人の精神に傳へられるものだといふのである。『雨月物語』の中には、『赤穴惣右衛門』が約束を果すために、自殺して幽霊となり、遠隔の土地へ、所定の時間にはあらはれる小説があるが、約束を果さねばならぬと一念を凝して死んだがため、その一念の先方へ通じた現象だと説明出来ぬことはない。フランマリオンの『靈魂の謎』の中にも、エミル・ステファンは次のやうに語つて居る。たしか、一八五四年だつたと思ふ。私の繼母の父は、私の郷里ミュールハウゼンで澤山の雇人をつかつて暮して居たが、その中に一人、非常な怠けものがあつて、どうにも手にをへず、あるとき祖父は怒つて、そんなことでは貴様は絞首臺で眼をつぶるやうなことになるぞと叫んだ位であつた。それから二三年過ぎたある朝、祖父は家族のものと朝飯を食べて居たが、突然立ち上つて、誰だ？ 何しに來たんだ？ と言つた。家族のものは、誰もはひつて來ないのに驚いて、どうしたのですかときくと、祖父は、今、誰やらが、旦那様、さやうならいつたよと答へた。けれど祖父の外には誰も

その聲をきいたものがなかつた。すると、二三時間の後、件のなまけものが、森の中で首を吊つたといふ報知が、祖父の家に届いた。

やはり同じ書物の中に、ある音楽家がフランマリオンに宛てた次のやうな手紙が載せられてある。

「一八九六年六月、母は私のあとを追つてローマへ來ました。母はある下宿に滞在して居ましたが、ある朝、顔色を變へて私を訪ねましたので、どうしたのですかときくと、今、着物をきかへて居ると、突然甥のレーネがあらはれ、「僕、死んだのです」といつたので、びつくりして走つて來たと申しました。私はその時出来るだけ母を慰めました。二週間の後、母と共にパリへ歸つてきますと、十四歳になるレーネは母のところへあらはれた日に死んだといふことでした。レーネの病氣は腹膜炎でしたが、その朝頻りに叔母即ち私の母の名を呼んで逢ひたいと云つたさうです……」

かうして見ると、人間の一念は、ある場合に、先方に通ずるものだといふことがわかる。

三

以上は「蟲の知らせ」の話であつて、かうした例はまだ澤山あるが、紙面が残り少なくなつたから、

これから私は「死の豫兆」について語らうと思ふ。これも「蟲の知らせ」と甚だ似たものであつて人の死ぬ前に起る不思議な現象をいふのであるから、「蟲の知らせ」も「死の豫兆」の一つと見做し得ないでもない。昔から烏啼きが悪かつたり、人魂が出たりすると死人があるといはれて居るが、このうち、烏啼きは必ずしも心霊現象といはれないと思ふ。「死の豫兆」は死ぬ本人が知つて居る場合と知らぬ場合とあるが、これも「夢」としてあらはれることが比較的多いらしい。「慶長見聞集」には正左衛門といふ漁翁が一夜夢に、阿彌陀如來があらはれ、來々年の十月十五日には必ず迎へに來ると仰せられたと見て、果して翌々年の十月十五日に死ぬ話がかゝれてあるが、かやうな例はどちらかといふと「自己暗示」が關係して居るかもしれない。ドイツア教授の「精神の彼方から」といふ書物の中には次のやうな話が引用されてある。アメリカのある若い臨月の女が、三月五日に、すつと昔亡くなつた父の夢を見た。父は手に大きな活字の曆をもつて三月二十二日を指して居たので、覺めてから彼女は、姉を始め親戚のものに夢の話をして三月二十二日に御産があるだらうと語つた。ところが豫期に反して御産は三月十二日にあつた。産婦はその後夢の話をしなかつたが、三月二十一日の午後突然意識を失つたかと思ふと、翌二十二日、敢なくも此世を去つた。

日本では指に「魚の目」が出來ると、家族又は親戚のものが死ぬといはれて居るが、西洋でもシャツやその他の洗濯物に「死の十字架」があらはれると、家族のものが死ぬといはれて居る。一九〇九年ライプチツヒで發行されたボルマン博士の書物の中には、次のやうな、ある女の談話が擧げられてある。

「私の子供の時分には、洗濯物に「死の十字架」があらはれると、家族又は親戚のものが必ず死ぬといはれて居りました。黒い小さい十字架は、何で洗つても決しておちず、人が死ぬとすぐ様消えるのです。私の叔父が死ぬ前には、十字架が私の寢臺の敷布にあらはれました。又ある年には三個の十字架が一時にあらはれましたが、その後六週間の間に大人二人と子供一人が、家族の中で死にました。」
かうしたものが果して心霊現象であるかどうかはわからないが、兎に角、若し事實であるとするとい寸説明のつかぬ不思議な現象である。

すべて心霊現象の研究に際しては、記録の内容が果して正確なものかどうかを先づ確かめねばならない。が、それを確かめることは頗る困難であつて、従つて心霊現象の「科學的」研究は甚だ面倒なものである。

傳説と科學

一

「やつ、大變。あれを御覽なされい。」

ある日、中歐の某寺院で、祭壇の前へ近づいた一人の僧侶が、連立つた僧侶を顧みながら、御供へ餅を指して言つた。

「ほんに、ほんに。御餅から血が出て居る!!」と相手は眼をむいて答へたが、そのとき二人は、何ともいへぬ恐しさに襲はれて、うすぐらい祭壇をあとに、轉ぶやうに逃げ出して異變を長老に告げた。

時は西曆一二九二年即ち今から六百三十年ほど前のことである。異變を傳へ聞いて駭けつけた人々は、

「血だ! 血だ! 御餅から血が出たんだ。神様が御怒りになつたんだ。あゝ! あゝ!」と、恐しさに餅を手を取つて見るものもなく、餅について居る赤いものをながめて、異口同音に叫ぶのであつた。

それから、誰言ふとなく、この不可思議な現象は、神様が世間の不淨、ことにユダヤ人が財貨を私してゐることを御怒りになつたためだといふことになり、フランクフルト、ウユルツブルヒ、ニュルンベルグ等に在住して居るユダヤ人は片つ端から虐殺され、その數が凡そ一萬人に達したといふことである。誠にユダヤ人こそ、いゝ迷惑で、第十四世紀の歐洲に於けるペスト大流行の際にも、かやうな恐しい病が起つたのはユダヤ人が雜居して居るためだと解釋され、バヅアリアだけでも一萬二千人のユダヤ人が虐殺された。科學さへ發達して居たなら、さうした迫害にも逢はなかつたであらうに、人間の無智は見當ちがひにも無辜なユダヤ人にたゞつてしまつた。現今、偉大なる科學者の中にユダヤ人が甚だ多いのも、一種の皮肉な現象と見えぬでもない。故人となつたけれど、醫學者エールリッヒや化學者フイツシャーは不出世の人々であつて相對性原理のアインシュタインと共に、皆ユダヤ人である。かうして見ると、苦しんだ民族でなければ偉大なる科學者は出ないかもしれない。日本に

偉大な科學者の少いのは、まだく日本民族の苦しみやうが足らぬのかも知れない。

話しは前へ戻つて、一三八三年にも、今のポーツダムの近くのウィルスナツクの某寺院で、やはり聖壇の餅が血を吹き出して大騒ぎとなり、所謂「ウィルスナツクの驚異」として今に傳へられて居る。それから一八一九年にイタリアのバツア附近の村で、パンが眞紅の血にまみれて農民の間に大恐怖を來した。その時セツテといふ醫者が、勇を鼓して、その紅いものに觸つて見、それを他のパンに移して見たところ、立派に繁殖することを認めた。そして遂に、一八八四年に至つて生物學者のエーレンベルグが伯林に於てこの紅いものゝ研究をとけ、このものが赤い色素を出す一種の細菌に過ぎぬことを知つた。現今この細菌は「靈異菌」と名けられて居るが、其の名に似合はず空氣中に普通に存在するものである。

その昔人類を極度に恐怖せしめたペストを始め各種の傳染病も、現今では微生物の寄生によるものだとわかり、簡單なる豫防方法さへ講ずれば、そのうちのあるものには決して冒されぬことがわかつた。又、たとひ不幸にしてこれに冒されることがあつても、あるものは比較的簡單に治療することが出来るやうになつた。かくて科學は地球上の幾多の迷信と傳説を壊し人類の恐怖を除いて、この勢で

進んだならば、遠からず、各種の迷信や傳説はその跡を絶ち各種の恐怖も可及少くなるかのやうに思はれぬでもない。

二

ところが事實は決してさうではなく、科學の發達した今日に於ても、昔ながらの迷信が依然として人類の頭に巢を喰つて居る。大正七年の冬から翌年にかけて流行性感冒が日本で猖獗を極めたとき、其れを豫防するために、「吉三留守」と書いた紙札を戸口に貼つた人が少くなかつたといふことである。これは流行性感冒のことを「お七風」と俗に呼ぶから、お七の戀人の吉三が留守だと書いて貼つて置けば、お七風は家の中へはひつて來ないといふ極めて合理的(?)な考へから出たものである。この「お七風」の名は、享和二年の流行の際、八百屋お七の小唄が世に行はれて居たから名づけたものであつて、八百屋お七その人とは何の関係もないのである。お七は定めし地下で苦笑しながら、

「わたしや火に縁はあつても風には縁が御座いません」

といつて居ることだらう。私は先年の世界流行當時にはニューヨークに居て、輕いのに罹つたがさす

がに、アメリカ人の中には「吉三留守」などと書いて入口に貼出すものはなかつたやうである。尤もそれはアメリカ人が進んだ人種であるから書かぬのではなく、「吉三留守」と書いて貼つたところが、お七は英語が読めぬから、その効がないためである。

かういふとアメリカ人は、「人を馬鹿にするな」といつて怒り出すかも知れぬが、そのアメリカ人も、「猿裁判」を惹き起すやうでは決して大きな顔は出来まい。「猿裁判」については、讀者はすでに御承知でもあらうが、如何に科學的時代にありても、人間が迷信から脱することがむづかしいものであるか、といふ例證として、こゝに記して置かうと思ふ。

北米合衆國の四十八州が、各自獨立の法律を設けて居ることは周知のことであるが、その四十八州のうち、十五州に、ダーウインの創唱した進化論を學校で教へてはならぬ、といふ奇抜な法律が設けられて居る。そのうちテネシー州では、今年の三月二十一日から、この法律が設けられたところ、先日、同州デートン町のハイスクールで、スコープスといふ教師が學生に向つて進化論を教へたので、同教師は、直ちに警察へ引張られたのである。

一たいどうしてかやうな法律が設けられたかといふに、進化論の教は聖書の教に反するものである

からキリスト教を侮辱することになり、無邪氣な子供の心から信仰を奪ふのがいけないといふのである。言ふ迄もなく、聖書の教へる所は、各種の生物は神の手で創造されたものであるといふのであるし、進化論の教へる所は各種の生物は下等の動物から高等の動物へ進化したもので、猿も人間もその祖先は同じであるといふのである。従つて兩者の教は全く相反して居るが、もはや今日では進化論は一の常識であつて其を教へることを禁ずるなどといふことは一寸考へることがむづかし位である。それにも拘はらず、合衆國では十五州までも、進化論禁止の法律を出して居るといふことは、流行性感冒に、「吉三留守」と貼り出すよりも、その滑稽さ加減では數等上手である。

さて、スコープスが警察へ引張られたときくなり、ラップリエーといふ技師は大に憤慨して、スコープスに同情し、米國市民自由聯盟に一切の費用を引受けてもらつて州法の不備を裁判所に訴へ出た。そこで愈々事が大袈裟になり、「猿裁判」の名によつて米國全土の人々の注意の焦點となるに至り、或は新聞紙の漫畫の種となり、或は各種會合の席上での話題となつて居る。駄洒落の好きなアメリカ人のことであるから、「さるとは狭い御料簡」と洒落て居た人間も少なくなからうが、平和論者ブライアンの如きは自から辯護士として、州法擁護の熱辯を振はうといきまいて居る。米國大審院がどんな判決

を下すか知れないけれど、近來の珍裁判であることは疑ひない。

私はこの報知を読んで、歐洲中世に行はれた「動物裁判」のことを思ひ出した。動物裁判とは罪を犯した動物を裁判所又は教會の裁判にかけて、人間なみの刑罰を加へることをいふのである。一三八六年、フアレースで一疋の牝豚が、ある人間の子供の顔と手を噛んだ廉によつて裁判されたとき、被告は美しい人間の衣服を着て出廷したが、有罪と決して死刑の宣告を受けた。又、一六九九年オヴルニユで、「あをむし」が大に繁殖して、作物を荒したとき、議會は緊急動機によつて「あをむし」の裁判を高等法院に命令したので、高等法院では、とりあへず、財産侵害の廉に依つて、「あをむし」に召喚状を發したが、「あをむし」は一疋も裁判所へ出頭しなかつた。そこでやむを得ず缺席のまゝ裁判を行ひ、その結果、「あをむし」は死刑に處せられたが、づう／＼しい彼等は所定の日にも刑場へ姿をあらはさなかつた。

これは作り話でも何でもなく、本當のことである。眞面目も眞面目、大眞眞目で、「あをむし」に召喚状を發したのである。今回米國に起つた裁判は、名は「猿裁判」であるけれども前記の「豚裁判」や「あをむし裁判」とちがつて、直接猿を呼び出して行ふ裁判でなく、人間が猿から進化したものか

さうでないかを裁判しようとするものである。見やうによつては、「豚裁判」や「あをむし裁判」よりも、もつと奇抜であつて、うっかりすると「あをむし」に笑はれるかも知れない。歴史は繰返すといふけれども、かういふ形式で繰返されようとは私は夢にも思はなかつた。私は事の序に、米國大審院に、「鶏が先へ出來たか、卵が先へ出來たか」をも裁判してほしいと思ふ。

三

科學が長足の進歩を遂げた今の時代に、かうした珍現象の生ずるのは畢竟、人間の心の中に、迷信を離れることの出來ぬ性情がこびりついて居るからである。迷信や傳説が科學によつて段々壊されて行つても、人間の心そのものは、なか／＼科學的になつて行かないのである。例へば、「丙午の女」の迷信など、一寸考へて見たならば、その馬鹿々々しさに呆れざるを得ないが、さて丙午生れの女を娶るといふことになると、相手の男の頭には程度の差こそあれ、一瞬不快な聯想が浮ぶにちがひない。だから識者が口を酸くして迷信打破を叫んでも、丙午の迷信から來る悲劇は世に絶えぬのである。時には丙午の迷信を少しも知らなかつた人が、丙午の迷信打破の説話を讀んで、却つてその迷信にとら

はれるやうになる場合がないでもなからう。

一方に於て、現代の科學は必ずしも總ての現象を説明し得る迄に進んで居ない。このことが又、人をして、科學にあきたらぬ感じを懷かせ、却つて神祕にあこがれる動機を作る場合がある。科學は傳説や迷信を始め、自然界、人間界に起る種々の奇現象を説明するに當つて、多くはその本態に觸れずに、説明の言葉をかへるに過ぎぬことがある。例へば非常時にあらはれる超人的な力を、潜在意識の活動によつて説明しようとする科學は、潜在意識の本態に就て何も言はない。否、言ひ得ないのである。又、女子の身體に見られる色々な奇現象を女子のヒステリーによつて説明しようとする科學はヒステリーの何物なるかを説明することが出来ない。

例へばこゝに「ゴズチグマチゼーション」なる現象がある。スチグマチゼーションとは、敬虔なキリスト教信者が、十字架にかけられたキリストの苦痛に同情した結果、キリストが傷を受けたと同じ場所、即ち手、足、胸などに、突然傷が出来て出血する現象をいふのである、有名な聖フランシスをはじめ尼僧ルイズ・ラトウや、尼僧アンナ・カタリナ・エムメリッヒに起つたことで、極めて稀な現象ではあるが、決して作り話ではなく、有名なフランスの神經病學者シャルコーはヒステリー患者に生ずる開放

性創傷と同じものだらうと言つて居る。アンナ・カタリナ・エムメリッヒの「スチグマチゼーション」について、ブレンタノの記載したところに依ると、一八一二年十二月二十九日午後三時、彼女の病は非常に悪くなつて來た。彼女は兩手を擴げて、寢臺の上に横はり、教主の苦痛を思つて、共に苦んで見たいと頻りに願つた。そこで彼女はキリストの五ヶ所の傷に對して五回の祈禱を行つた。すると彼女の顔は眞赤になり、はげしい苦痛を感じると同時に恍惚たる歡喜の情に充され、初めは兩手に、次には兩足に、最後に右の胸から、三筋づつの血が迸り出で、彼女は永い間人事不省に陥つたが、やがて我に返ると、兩手兩足にはげしい痛みを感じた。この状態はその後毎金曜日に起り、十一年間続いたので、その間に彼女は多くの醫者により診察され研究された。然し、どの醫者もたゞその事實をたしかめるに過ぎないだけで、その本體を説明することが出来なかつた。

想像力、ことに女子の想像力が如何にその身體にはげしい影響を及ぼすものであるかは、かの想像妊娠の現象からでも之を覗ひ知ることが出来る。想像妊娠とは、妊娠したにちがひないと思ひこむだけで、實際は妊娠して居ないのにその腹が段々大きくなる現象をいふのである。世界史上最も名高い想像妊娠は暴君として汚名をとゞめた英國の女王メリーであつて、彼女はカソリック教の世繼を得た

いものと頻りに神に祈つた結果、遂に月経がとまり、乳房がふくらみ、悪阻が始まり、腹が段々大きくなつた。彼女は喜んで、うぶ着の製作に餘念なく十ヶ月目には陣痛さへ始まつたので、女王出産の趣はロンドン市中に報ぜられ、市民は聖ポールス寺院へ駈けて大僧正からの報告を待ちかまへ、宮廷からはローマ法王に特使が派遣された。然し乍ら、女王の喜びもみな穢喜びに終つてしまひ、女王はその後猛烈なヒステリーにかゝつたので彼女の良人フィリップも彼女を持ってあまして逃げてしまつた。それから間もなく、かの新教徒虐殺のいまはしい事件が女王によつて惹き起されたのである。

スチグマチゼーションにしろ、想像妊娠にしろ、ヒステリーと関係のあることは想像するに難くないが、そのヒステリーが何ものかといふことになる、科學のそれに對する説明は頗る物足らない。こんなわけでやゝもすると、科學に對して不満の感をいだくものがあり、一方に於て人間には怪奇にあこがれる性質があるのであるから、この世の中から迷信をなくすることは當分のうちはまだ望み得ないだらうと思ふ。

生體解剖

—

さきに私は「傳説と科學」なる一文を物して、アメリカの「猿裁判」のことを紹介した。それはテネシー州デントン町のハイスクールで、スコープスといふ教師が、學生に向つて、ダーウインの進化論を教へたところ、進化論が聖書の教へに反するから、學校で教へてはならぬといふ同州の法律に觸れて、告發され、裁判を受けることになつたといふ話で、この話を紹介した當時は、まだ裁判の結果はわからなかつたが、その後愈々裁判が行はれ、スコープスは有罪と認められて、百弗の罰金に處せられたのである。このことは讀者も既に新聞紙を通じて御承知のことであらうと思ふ。

裁判は約二週間續いたが、進化論のシの字も知らぬ百姓陪審官たちは、聖書の方が「ありがたい」と思つたのか、みごとに人間の歴史から「猿」を撃退したので、スコープスは直ちに州の大審院へ控

訴した。若し州大審院で敗けた曉にはワシントンの合衆國大審院へ持ち出すさうで、その意氣は大に壯とすべきであるが、かやうな現象を起したアメリカのえらさ加減も又實に烈たりといはざるを得ない。

先の米國國務卿であり、又平和論者であるブライアン氏は、極端なる保守派の人物で、裁判の際、かねて聲明せるごとく、州辯護士のために熱辯を揮ひ、たうとう聖書に軍配團扇を上げさせて、そのために一安心したのか、裁判後日ならずして資を易へ、神様の國へ報告に赴いたのである。法廷に於て、ブライアン氏と、スコープス側の辯護士ダロー氏との間に行はれた問答はまことに珍中の珍、思はずシャツの襟を正さしめるものがある。

「この地球は出来てから何年ぐらゐる経ちますか。」とダロー氏。

「そんなことは知りませんが、四千年以上経つて居ることは確です。」と、ブライアン氏。

「あなたは地球が六日間で出来たと思ひますか。」

「六日間といつても二十四時間を一日とする六日間ではありません。一日といふのは一時代だと思ひます。」

「その一時代とはどれ程の永さですか。」

「知りません。六日としても、六年としても、六百萬年としても、いづれを信じてもよいと思ひます。」

「太陽が四ヶ月に作られたといふことを信じますか。」

「勿論です。」

「イヴが最初の婦人だといふことを信じますか。」

「勿論です。」

「イヴがアダムの肋骨から造られたといふことを信じますか。」

「勿論です。」

「カインが何處から妻を得たか知つて居ますか。」

「知りません。」

「さうでせう。バイブルには書いてありませんからねえ……」

これが二十世紀のアメリカの法廷で、堂々として行はれた問答だとは一寸考へにくい程である。「穢

裁判」の由來を知らぬ人が、この問答を読んだならば、恐らく精神病學者が患者の智力検査をした記録だと思ふであらう。まさか言葉の行きがかり上返答したのでもあるまいが、イヴがアダムの肋骨から造られたと信ずると明言するなど、實に沙汰の限りと言はねばならない。その昔、文藝復興期の大解剖學者コロンブスが、當時の迷信を打破するために、男女とも肋骨は十二對だと言明して問題を惹き起したことがある。それは、その當時迄、イヴがアダムの肋骨から作られた關係上、女の肋骨は男の肋骨よりも一本多いといふ迷信があつたからである。ところがあるとき偶然にも、コロンブスは一側に十三本の肋骨を有する畸形の女の死體に出這つたので、人々は「それ見たことが、この罰當りめが。」と口々に罵りながら、コロンブスの居たピサの大學に殺到して、彼の説を曲げさせようとしたといふことである。これは今から三百年も前の話であるが、いまブライアン氏の返答を読むと、氏はそれ等の愚民よりも遙かに上手である。沙翁と同時代の英國の文豪トーマス・ブラウンは、この、男女肋骨相異論に對して、たとひアダムの肋骨を一本失つたとて、アダムの子孫はその状態を遺傳するものではない。例へば雙眼を失つた者の子には兩眼が附いてくるではないか。」と反駁して居るが、私は「猿裁判」の記事を読んだとき、このブラウンを引張つて來て法廷に立たせたら面白いと思つた。男女肋

骨數相異論などを眞面目に反駁するさへ、今から見れば野暮の至りであるが、ブライアン氏の如き人間を納得させるには、ブラウンぐらゐの眞面目さがなくてはならない。若しこの事件が合衆國大審院へでもまはされたら、さしあたり辯護士として、トーマス・ブラウンのやうな人物を選ぶやうにするがよいと私は忠告したのである。

二

ブライアン氏を始め保守派の連中の頭腦が、識者の物笑ひとなるのは、彼等が聖書に書かれた一字一句をその儘無條件で信じようとするところにある。聖書の記事でも、解釋の仕やうによつては、自然科學と矛盾しないやうにすることが出来る。たとへば天地創造説について考へて見ても、人類として發達すべき生物や、猿として發達すべき生物が初めから定まつて居たと考へるときは、進化論にも立派に對抗することが出来る譯である。もつと委しく言ふならば、人間が猿の時代を経て來たといふ進化論の所説に對して、人間は進化の途中で猿に似た生物の状態を経て來たのだと説明し、人間になるべき下等生物と猿になるべき下等生物とは、同じくアミーバ様のものでも、初めから異つて居つた

と主張するときは、バイブルの説を科學的に擁護し得る譯である。現にブライアン自身も、前記の問答の中で、『六日間といつても、それは二十四時間を一日とする六日間ではなく、一日といふのは一時代だと思ふ。』といふ解釋をして居るから、嚴密にいへば、それだけでも既に聖書の記事を全然信じて居るとはいへず、神を冒瀆したものと云ひ得るかも知れない。ブライアン氏は、『多くの科學者が子供を宗教から奪つて無神論にする。』ことを憂ひて、州法を以て進化論を禁じようとしたのであるが、かういふ融通のきかぬ態度こそは却つて、多くの子供をして宗教家に慊らぬ感を起さしめ宗教を離れしめるに至るであらう。

私の生家は浄土眞宗であつて、父母は大の信者であつたから、時々僧侶を招いて説教の座元をしたが、その僧侶の一人にNといふ坊さんがあつて、父母はこの人を非常に尊敬して居た。私も子供ながら、N氏はよほどのえらい人だと思つて居た。ところがある時N氏は自分の村へ落雷のあつた話をした。雷は最初風呂場の中へ落ち家の中をあらしまはつて勝手許に至り、引窓を抜けて逃げ去つたと眞面目な顔で話すのであつた。私は子供心にもN氏に對して幻滅を感じ、それより暫くの間は、一般僧侶に對して尊敬の念を失つたばかりでなく、ひいては宗教に對しても快い感じがしなくなつた。これ

は私一人の特殊な例であるかも知れぬが、宗教家たるものはその一言一行を慎まねばならぬものだと私は思ふのである。いかにバイブルを盲信するとはいへ、科學に對する正しい理解ぐらゐ持つ元氣にならなければ、眞に世の中を救ふことは出来ないであらう。單に宗教家ばかりでなく、科學者もまた宗教家の心持に同情する度量はなければならぬ「猿裁判」の如きは、どちらかといふと、融通のきかぬ同志の争鬭現象の一つであるかもしれない。

三

いづれにしてもアメリカには、科學に對して無暗な反抗心を抱くものが少くなく、生體解剖反對運動」の如きもその一つであらう。生體解剖反對運動は、アメリカばかりでなく英國にもあつて、英國で現今、醫學上の研究に實驗動物を用ふるには、必ず内務大臣の許可を得なければならなくなつて居るのも、この生體解剖反對運動の結果といつてよからう。

生體解剖とは、いふまでもなく、動物に麻酔劑をかけないで、實驗上の手術を行ふことをいふのであつて、いかにもそれは殘酷に思はれるから、反對運動の起るのはまさに當然のことである。ところ

が如何なる「運動」も極端に走り易いのであつて、生體解剖反對者たちは、現代の實驗醫學そのものをさへ呪はうとして居るのである。この運動に加入して居るものは大部分女子であるが、試みに彼等の言ふ所の一二をあけるならば、ニューヨークのベレー夫人は、

「バストールとその後繼者たちは、狂犬病といふ非常に稀な疾病を世間に擴げ、狂犬病豫防液によつて巨萬の財産を作りあげた。」

といひ、又バツヂャー夫人は、

「バストールは單に殺人者であるばかりでなく、魔術者であり竊盜者であつて、私たちは、たしかにそれを證據立てることが出来る。」

と放言して居る。實に御話しにならぬ連中で、聖書を盲信する前記、ブライアン氏一派の保守派連中と比較すると、その頑迷固陋さ加減に於てはまさに好一對と言ふべきである。彼等は醫學の成立を少しも理解せず、動物實驗なるものゝ眞髓を少しも知らず、動物に對する安つほい同情心から、反對するために反對しようとするに過ぎない。バストールが狂犬病といふ恐い病から人類を救はんが爲に、如何に苦心慘憺したかは到底筆紙のよくするところではない。バストール以前には狂犬病は

不治と稱してよい病であつたのであるから、バストールのためにその後どれだけの人が救はれたか知れない。

又、バストール自身は極めて信仰の厚い基督教徒であつて、彼が實驗動物を愛する態度は、はたで見居ても、をかしいくらる熱烈であつたと言はれて居る。彼は常に弟子に向つて、動物に濫りに苦痛を與へぬやうに注意を與へ、自ら實驗するにあつても、心の中では涙を流して、「人類のために、可哀相だが犠牲になつてくれ。」と叫び乍ら行つたといはれて居る。それにも拘はらず、生體解剖反對者たちがバストールを指して殺人者と罵るのは、要するに彼等の無智の然らしむる所で、そんな人間のいふことなど、多くの者は相手にしないけれど、それでも可なりな勢力を持つて居る。

よく考へて見ると、彼等の行爲そのものがすでに矛盾だらけである。彼等は平氣で獸類の肉を食べ獸類の毛皮を襟巻として居る。眞に動物の苦痛を救ふつもりであるならば、先づ屠獸といふことに反對して然るべきである。毛皮を取るためには通常良が用ゐられるが、良にかゝつた動物が如何に苦しむものであるかといふことは、一度も考へても見ないらしい。良にかゝつた動物の受ける苦痛と、實驗室で動物の受ける苦痛とに差別のある筈はないから、須らく毛皮を作ることにも反對すべきである。

のに、それに對しては何喰はぬ顔をして、たゞ醫學上の研究に用ゐらるゝ動物の苦痛のみを兎や角言ふのである。

かういふ連中は、人類同胞が苦しむことにも、何の痛痒を感じないのが常である。ヂフテリアにかつた小兒の苦痛が如何にはけしいものであるか、腦脊髓膜炎にかゝつた小兒がどれほど苦しむものかなどといふことには一向無關心であつて、そのヂフテリアの療法を研究したり、腦脊髓膜炎の診斷法を研究するために使用さるゝ家兎やモルモットの苦痛に對してのみ敏感であるといふことは何といふ自家撞着の心であらう。

落語にこんな話がある。ある信心あつた隠居が鰻屋の前をとほると、主人が俎板の上に鰻をのせて庖丁を振りまはして居た。隠居はこれを見て不便に思ひ、その鰻を残らず買ひ取つて附近の大川の橋の上から投げてやつた。翌日も翌々日も隠居は、鰻屋の前をとほる度毎に不便だからと言つて買ひ取つては大川の中へ投げこんで居た。鰻屋もらくに金儲けの出来るのを喜んで、後には、わざと隠居のとほる時刻を見はからつては、鰻を俎板の上のせ、隠居の同情心をそゝるのであつた。ある日のこと隠居がむかうから來かゝつたところ、生憎鰻屋は鰻を持つて居なかつたので咄嗟の間に一策を案じ、

赤ん坊を俎板の上のせて、庖丁を振り上げ、隠居のとほりかゝるのを待つた。やがて隠居は鰻屋の前へ來て大に驚き、何をするかとたづねると鰻の代りに赤ん坊を料理してたべるといふ。「可哀さうだ俺が買つて助けてやらう。」「買つて下さるか。」「買はう。」「よろしい。」かういつて鰻屋が、若干の金を受取つて赤ん坊を渡すと、隠居は喜んでそれを抱き、いつものとほり、橋の上に来て、鰻を投げるやうに、どぶんとその赤ん坊を川中に投げこんだ。

生體解剖反對者の態度は、まさにこの隠居の態度に比すべきものである。即ち、彼等は動物の苦痛を救ふために人間の苦痛を犠牲にしようとして居る。ちやうど、かの犬公方が犬を虐待したものを嚴罰に處したことゝ少しも變らないのである。

四

尤もかうした生體解剖反對運動の起つたのは、まんざら醫學者の方に罪がないでもない。兎角、醫學研究に従事するものは、人間なり動物なりの苦痛に對して、鈍感になり易く、ために、麻酔劑を用ゐて手術を行つてもかまはぬ時に、麻酔劑を用ゐなかつたりするものも少くはなく、時として實驗室

の中では可なり残酷に思はれることが行はれぬでもない。かうした態度には私は絶対に反対であつて已むを得ない限りは必ず麻酔劑を使用し、可及的に動物の苦痛を少くする手段を講ずべきであらうと思ふ。ことに學生の前で、残酷に思はれることをして見せると、その學生をして、醫學に對する一種の反感を持たしめぬとは限らないのである。

又實驗そのものに就てもさうであつて、人類の福祉とあまり関係のないやうな題目を選んで、單なる科學的興味のために、みだりに動物を苦めることは差控ふべきであらうと思ふ。嘗てドイツ及びフランスの心理學者たちの間に、拷問時の情緒の變化を研究するために、動物を拷問にかけることが一時流行したことがある。かやうな問題は、科學的には興味があるかも知れぬけれど、人類の安寧幸福には差し當り關係が少いやうに思はれ、出来るなら後廻しにしてほしいと思ふが、若しどうしても行はねばならぬとしたら、何か別の方法を考へて然るべきであらうと思ふ。尤も實驗者が眞に人間を愛し又動物を愛する人であるならば、自から適當な方法が考へ出さるべき筈である。

日本には幸か不幸か生體解剖反對運動の具體的なものはまだないやうであるけれども、何事でも受賣の好きな日本人は、そのうちにかうした運動にも手を染めるかも知れない、若しもかゝる運動が起つ

たとしたならば、私はそれに従事する人々が、アメリカの女たちのやうに笑ふべき態度にならぬやうにしてほしいのである。

バイブルの記事を文字通りに解釋したり、人類の恩人バストールを殺人者よばはりするのも、畢竟するところ、人類文明といふことに、深い省察と理解とが缺けて居るからである。アメリカ人たちは、自分では、人類文明を眞に理解し、その文明の恩澤に浴して居るつもりであるかも知れぬけれど、そのアメリカ人の一部に、かやうな頑迷な徒のあることは、決して偶然のことではないと思ふ。物質文明の極度に達して居る國として、自他共に許して居るアメリカの内輪に、このやうな腫物があるかと思ふと、私たちは、決して、對岸の火災視しては居れないと思ふ。

醫 業 と 道 徳

—

最近某大學の醫學部では、「特診料」が問題となつて二教授の免官となり、醫術の弊害の一部分が天下に暴露された。誠に残念なことであるけれど、一方から見れば、大學の先生たちばかりでなく、一般に醫を業とする人の反省を促がすに足る出来事であつて、この際醫者は勿論一般の人々も十分考慮してほしいと思つてこの一文を草するのである。

すでに、「漢事始」といふ書の中にも、「世の醫を業とする人を見るに、其のありさまは醫に似たれども、みづから吾任は醫なり」と思ふ心なく、たゞ人を欺き或ひはなぐさみ事に此の業をすと思へるけしきにて、其の心を專一に醫術に用ゐる、其の事をかたんじ、力を盡して其の業をつとむる人は少し、もし其の身の生福あつく、又は病家の幸ありて、藥を投じて驗を得る事、しばくあれば、はや其の身を軒岐の如く思ひ、自ら媒して其の術を賣り、かくて後は、權門勢家及び富商巨農の、藥資をおほく償ひ與へんと見えたる人のもとには、しばく伺候して、媚び諂ひ、とこしなへに吾醫術の長ぜる事をいひはやし、今日はさる病人をいやし、きのふは死するものをいかせしなど、人も間はぬ物語して、てらひまはり、世に信用せられん事をはかる事、頭につける火を拂ふがごとし、しかはあれども、寒士貧民の病めるには、しばくまねけども來らず、病家は甚だいきどほりおもふといへども

病さへ療さば、外の事はさもあらばあれとて、人をたのみ、何くれとして猶ほも、一法を與へん事を乞ひ求む、さのみは辭し難くて、もしは來りて病人を見るといへども、其のさま主君の下人の病を訪へる如くして、みづから矜り高ぶり、藥を與ふれども後の藥資の考へをして、唐藥を用ゐずしてかなはぬ重き病にも、和藥を用ゐる、大劑を用ゐてよき病人にも小劑をあたふるがたひ、きくもうるさき事多し、かゝる醫師をば、仁術者とや言ふべき、天地の人物をそだて、聖人の世を憂ひ人をあはれみて、醫藥の道を起したまふ本意にそむきぬる事は言ふに及ばず、中世良醫の、人を治療せし志と、年を同うして語るべきにもあらざれば、天地聖人の大罪人なりと言ひつべし。」

とあるごとく、醫業の弊は今に始まつたことではなく、「寒士貧民の病めるには、しばくまねけども來らず」といふ言葉は、間接に「特診料」の弊を喝破したものと云つてよいであらう。仁術とは言ひ乍ら、醫者もその業によつて生活して行かねばならぬ以上、金のことに無關心であり得ないことは言ふ迄もないけれど、それが、病氣といふ他人の弱點を取り扱ふ職業であるだけに、とかく心の誘惑にかゝり易く、いつの間にか病人を治療するといふことよりも金を儲けるといふことを主なる目的であるかのやうに考へてしまひ、遂には本末を顛倒して、患者の吸收策にのみ腐心する輩が出来易い

である。

かやうな醫弊は、わが國ばかりでなく、歐米各國に於ても識者の夙に患ふる所となつて居る。數年前物故した英國の名醫オスラーも、「自己の利益を主眼とし、神聖なる招聘を單なる商賣と考へ、同胞をば商品扱にして、以て富を得ることに腐心したならば、やがて富は得られるであらうが、その代り人類の友と唱へられた醫業の尊い暖簾を傷つけ、名譽ある組合の信用を墜すばかりである」と誠めて居る。しかし、識者のかやうな警告などは多くの醫者に取つては馬耳東風であつて、ことに拜金主義の盛んなアメリカでは、この弊害が極度に達して居るらしく、ノーマン・バーネスピーといふ醫師は、「醫學的渾沌と犯罪」と稱する一書を著はして、アメリカの醫師の道德心の麻痺を痛罵し、一般民衆に、醫師の内幕をさらけ出して居る。私は左に、その中から二三の例を引用して、讀者諸君の参考に供しようと思ふ。

紐育市で最も有名な内科醫の一人であるX氏は、金儲けのために、いつも次のやうな方法を講ずる。患者が軽い神經衰弱ぐらゐであると、必ず「胃カタル」とか「胃痛」とかいふ診断を與へて、沃度加里の大量を處方し、「多分、嘔氣や頭痛や、胃部の痛みが起る筈だが、若し起つたなら、すぐ診察を受

けに来るがよい」と言つてかへす。もとより沃度加里を大量にのめば、どんな人にも嘔氣や頭痛が起る。で、患者は再び診察を乞ひに行く。するとX氏は沃度加里を減量して更に一週間ほどのみ続けさせる。一週間の終りには、食物が十分とれないために、患者がひよろ／＼になつてX氏を訪ねるとX氏ははじめて沃度加里を與へることをやめる。で、患者は直ちに輕快してX氏の手腕に感心し、X氏は爲に懷がふくらむ。

シカゴにK氏といふ若夫婦があつた。新世帯を持つときに千弗の借金をしたので、夫婦は汗水垂らして働き、その結果、やつとのことで銀行に千弗の貯金が出来て、不日返済の運びに至るのを楽しんでだ。その折も折、細君が急性の腹痛に罹つたので、良人は大に驚いて同市の最も有名な外科醫Y氏の所にかけて往診を頼んだ。するとY氏はすぐに患者の家に行かないで、先づK氏の經濟状態を調べ銀行に千弗の預金のあることを知つてから、K氏の家に行き、患者を診察して、

「こりや大へん、重症の蟲様突起炎だから、すぐ手術しなければ助からぬ」

と事もなげに言つた。K氏は少なからず驚いたが最愛の妻を助けるために、宜しく願ひますといふとY氏は、

「よろしい、その代り手術料を千弗前拂ひに貰ひます。」

と言つた。生命にはかへ難いので、Kは心の中で泣き乍ら、Y氏の言葉に従つた。

紐育醫學協會員の某氏が、あるとき某家の依頼で助手と看護婦とを連れて往診した。患者は、某ホテルの料理人の細君で子宮がわるく、小手術を行へばよいのであつた。ところが先方へ行くなり某氏は、クロロフォルム麻酔で手術を行ふには、助手と看護婦を連れてくる習慣だと説明すると、みすほらしい室に住んで居た夫婦は大に驚いて、クロロフォルムは怖いから、何か別の方法はありませんかといふと、某氏は、それではコカインの局所麻酔を行ふが、その代り二十五弗餘計にかゝるがよいかと念を押した。夫婦は相談の結果、コカインを用ゐてもらふことにした。ところが某氏は生憎コカインを持つて居なかつたので、食鹽水を注射して手術を行つた。患者は勿論、はげしい苦痛を訴へたがとに角、手術が済んで、某氏は手術料を請求した。料理人が恐るゝ何程差上げたらいいですかといふと、某氏は何喰はぬ顔して言つた。

『普通僕はこの手術に二百五十弗貰つて居るが、御見受け申す所、財政も豊かでないやうだから七十五弗でよろしいその代りコカイン代二十五弗は是非申受けねばならぬから都合百弗貰ひませう。』

ある日紐育市の煙草店へHといふ醫師が煙草を買ひにはひると、主人が出て來て、

「あなたは御醫者さんで御座いませう。御醫者さんといふものは随分むごいことをするものですねえ。」と言つた。H氏は面喰つて、「どうして？」ときくと、煙草屋の主人は悲しさうな顔をして言つた。

「この間、家内が重病でもう駄目だといふときに、かゝりつけの醫者は、私の不同意をまかまはずに、凡そ二十四時間の間に六人の専門家を引張つて來て診察させましたよ。私は銀行に千弗預けて居ましたが、そのうちの一番えらい人に三百弗とられ、あとの人たちに残りの八百弗を分け取りにされあけくの果に家内に死なれたので、たうとう葬式の費用を借金しました。」

H氏はあまりのことに、果して事實かどうかを調べたところ、残念乍ら事實であつた。

デトロイトのある病院へ、妊娠五ヶ月の若い女が、はげしい子癇を起した。入院した主任の醫師はとりあへず墮胎手術を行つたが、たうとう患者を救ふことが出来なかつた。かやうなはげしい子癇を起す程だから、妊娠中腎臓炎にかゝつて居たことは明かであり、尿さへ検査すれば、子癇を未然に防ぎ得るにちがひないので、病院の醫師が、その患者のかゝりつけの醫師に向つて、「これまで尿の検査をしたことがありますか。」ときくと、醫師は、

「いゝえ。」と答へた。

「どうしてですか？」

「金になりませんもの！」

二

ナポレオン一世が、ある日、聊か氣を腐らせて、

「もう戦争をやめて、醫師にならうかな。」と嘆息すると、傍に居た廷臣タレーランは、

「どちらにしても人殺しですなえ。」とからかつた。

昔から、醫師が、時々「人殺し」の代名詞に使用されて居るのも、その重大な原因は、やはり醫師が金儲けを主眼とし易いからであらう。前記の例のやうに、金にならないから尿の検査をしないやうでは、人殺しと罵られても、文句は言はれない譯である。ところが、これに似た現象は醫界に決して少くはなく、金になるために、未熟な腕で手術をしたり、或は又、手術をしないでよい場合に手術を敢てしてそのために、尊い人命を損ふといふやうな例はザラにある。左に述べるのも既記バーネス

ビーの著書に掲げられて居る例であるが、讀者諸君は恐らく、氣味の悪い戦慄を感じられるであらう。Pといふ老醫は二十五年間内科醫をやつて來たが、外科の方が収入が多いだらうと思つて、ある日、その看板をかけなほした。最初にやつて來たのは横痃を持った青年で、老醫は早速剔出をすゝめ、青年は老醫を信用して、手術を受けることになつた。愈々手術が始まつて、醫師は病的の淋巴腺を切り出したがその時深く切り過ぎて、動脈を傷けたので、血は瀧のやうに流れ出した。老醫は大に狼狽したが、兎にも角にも動脈をしぼつて患者を手術臺からベッドに移した。然し動脈がしぼられたため、程なく下腿が壞疽を起し始め、老醫は驚いて、熟練な外科醫を招き、やがて下腿切斷の手術が行はれたが、青年は驚駭と衰弱のために絶命した。このことがあつてからP老醫は再び内科醫に立ちかへつた。

同じやうな新米醫が、舌の慢性炎を舌痛と見做して手術したことがある。彼は即ち患者の舌全部を切り取つたばかりでなく、病氣の轉移を防ぐために頸部の多數の淋巴腺をも剔出した。それから彼は切り取つた舌と淋巴腺とを某大學の病理學教室に送つた鑑定を求めたところ、痛ではなくて、單純な炎症疾患に過ぎなかつた。即ち患者は醫師のために、とんだ舌切雀になつた譯である。かやうな場合

には先づ、舌の一小部分を切り取つて病理教室へ送り、癌腫といふたしかな診断が下されてから剔出手術を行ふべきであるが、單純なものといふ診断が下された日には、金にならぬから鬼のやうな醫師は、先づ患者の舌を抜いて金を取り、然る後、専門家の診断を乞うたのである。

社交界にその名を知られたG夫人は、度々蟲様突起炎に襲はれるのである時Rといふ外科醫をたづねて診察を受けた。Rは直ちに手術をすゝめたので、G夫人も決心して、蟲様突起を取つてもらつたが、幸にその経過がよくて、年來の禍根を絶つた喜びに、巨額の手術料の請求にも快く應じて、樂しく日を送り、逢ふ人毎にR氏の手腕を吹聴したので、R氏は大へんな繁昌をしてほく／＼ものであつた。

一年は無事に経過した。と、突然G夫人は以前襲はれたやうな腹痛に悩んだのである。蟲様突起は取去つて、もはや無い筈であるから、蟲様突起炎ではないが、どうも痛みの工合がそれに似て居るので、不思議に思つてR氏を呼ぶと、R氏は生憎差問のために、友のS氏を送つて診察せしめた。

Sは夫人の病歴をたづね、注意深く診察して、

「まらちがひなく蟲様突起炎です。」と言つた。

夫人はびつくりして、「だつて私の蟲様突起は、とつて貰ひました。」

「さうかも知れませんが、病氣は蟲様突起炎ですから手術しなければなりません。」

兎に角、苦痛がはけしいので、まさか自分には蟲様突起が二つあるかもしれないと思つた譯でもあるまいが、夫人はSの手術を受けることに決心したこのことを聞いたR醫師は不審に思つて手術に立合ふことを要求し、愈々手術に取りかゝると熟練なS氏は十數分間に病的の蟲様突起を剔出した。Rはびつくりした。いかにも蟲様突起に間ちがひないからである。

「やッ、若しそれが蟲様突起なら、僕の取り出したのは何だつたであらう？」
とRは叫んだ。

諸君諸君、Rの取り出したのは果して何だつたでせう。勿論私にもわからないが、女子の身體では蟲様突起と卵巣とがよく見誤られるといふことを、茲に一寸書添へて置きます。

以上はいづれもアメリカの例であるが、アメリカ以外の國にも、これに似たやうなことがないと誰が保障し得よう。

一たい、かやうなことを紹介するのは、世人をして徒らに現代の醫術に對して恐怖心を抱かしめる

虞がないでもないが、一面からいへば、醫者を選ぶ時の注意にもなるであらう。

醫業がかやうな弊に陥つたのも、その實は醫師の罪ばかりではなく、川柳に、

禮もせぬ癖に藪醫のなんのかの

とある如く、ある程度までは患者の方にもその責任があるであらう。多くの病は醫師の人格に絶対に信頼せねば治るものではないが、近頃の醫師と患者との間は随分水くさいやうである。かうしたところへ、所謂非醫者が乗じて來るのであつて、非醫者の弊は醫者の弊よりも更く、に甚しいものであるが、その論議は他日に譲つて置く。

奇病と迷信

一

現今では、コレラが流行つても、ペストが流行つても、これは神様が人間の罪惡を罰するために流

行せしめたまふのだと考へる者は甚だ少いが、その昔傳染病が猖獗を極めたときには、誰も皆、神罰又は天譴と信じて、無闇に怖れをのゝいたものである。それはいふ迄もなく、短時間のうちに多數の人が斃れ、しかもその病因がわからなかつたためであつて傳染病ならぬその他の病氣でも、その症狀の珍奇なものは、やはり天罰によつて生じたものと考へられるのが常であつた。

・悪いことをすれば悪い報いが來るといふ所謂因果應報の觀念は、人間が永久に振り捨てることの出來ぬものであるから、古來珍しい病氣が悪因に對する惡果であると考へられたのは無理でなく、それが段々誇張されて遇には荒唐奇怪の傳説を生ずるに至るのも、また自然の道理である。で、私はこれから、人面瘡、應聲蟲の二種の奇病を述べて、この關係を一層明かにして見たいと思ふのである。

人面瘡とは讀んで字の如く、人の顔のやうに眼口を具へた腫物をいふので、物を食べたり、聲を出したりするといふのであるが、もとより、そんな病氣のあらう筈はなく、全く、人間の錯覺から起つた一種の奇怪な傳説に過ぎないのである。この傳説は支那から渡つて來たものであるが、支那のいつ頃に始まつたものかは、はつきりして居ない、明の陳實功が編纂した「外科正宗」の中に「人面瘡は古生ずるもの有りと言へども、近世これを聞くこと稀なり」と書かれてあるところを見ると、人面瘡の

傳説はよほど古くから存在したものだと思はれるのである。

「伽婢子」の中にこんな話がある。山城國小椋の農夫が久しい間病床につき、或る時は悪寒發熱して「おこり」のやうであり、ある時は遍身いたみうづいて通風のやうであつたから、色々治療を試みたが效がなく、半年ばかり過ぎると右の膝の下に瘡が出来、その形が人の顔のやうで、目口があつたけれど鼻と耳はなく、口に酒を入れてやるとその面が赤くなり飯を入れてやると、口を動かして食べるのであつた。食物を與へる間は痛まぬけれども、さもないと痛みが甚しいので、諸方の醫師を招いて治療を乞うたがやはり駄目であつた。するとある日一人の道士が来て、これは人面瘡といふものであつて、この病にかゝつたものは必ず死ぬが、一つの手だてを施せば癒えるかもしれぬといつたので、農夫は、病さへなほれば田地を賣つてもかまはぬと言つて田地を賣つた代金を道士に渡した。道士はその金で色々な藥種を買ひ、一つづつ瘡の口に入れるとどれも皆受け入れたが、たゞ貝母（あみがさゆり）を差しつけると、眉をひそめ口を塞いだので道士は貝母を粉にして口を押し開き、芦の筒で吹き入れてやると、一週間の後に瘡は癒えてしまつたのである。

この話からもわかるがごとく人面瘡の生ずる部分は通常膝又は股で、時には腕や肘のこともあり、

特效藥として、貝母が用ゐられて居る。病の経過は上記の農夫のやうに比較的慢性なものもあるが中には急性なものもあつて「後太平記」に出て居る勝元の人面瘡などがその例である。「不思議なり東軍の大將勝元朝臣、卒に疔疽の病に臥し給ひ、寒熱往來甚しく、京中の名醫典藥頭、神仙祕法祕藥を盡すといへどもその驗なし、外科の名療來つて針灸の二術を盡しければ、その刺口俄に眼口出來て、人面瘡の病となり、言語悲泣の聲を發し、飯粥を食する事人の如し。」かくて人々は驚き、軍勢は色をかへて、諸社の奉幣や有驗の僧侶を招いたが、少しも驗がなかつたので、遂に陰陽の博士を召して卜はせると、山名右衛門入道の死靈の祟と、西陣群下の呪詛から起つた病氣だから到底祈禱や藥ではなほらないと言ふのであつた。

「奇疾便覽」の中に書かれてある、神樂觀陸道士の人面瘡も、その起因は人を殺したことゝされて居る。「觀答へて曰く、吾れ年十七の時、本房の老いたる僕と忿り争ひてこれを毆つ、僕房の後に死す吾が師急に薪を集めてこれを焚く、夜明けて人知る事なきこと、今已に十年を経たりと、瘡自ら言ふ僕なりと、忽ち瘡七日言はず、觀おもへらく病癒えたり」とあつて、これは人面瘡自身が「我は僕だ」と名乗つたので、原因については疑ふべき餘地が無いかもしれない(?)。又「近世拾遺物語」に

は「我れはもと武士にて、主君にもいやしからずつかへゆたかに暮し侍りしが、二十歳ばかりの頃、さだまれる妻とはなく、妾を置きて愛せしに、此のもの嫉妬の心ふかく、かりそめにも甚しくいかり恨みける、あるとき我、いたはることありて打臥しける、枕によりて又例のごとくらみけるを、あまりに腹にするかねつ扇を取りて二つ三つうちければ、こは情なき御事や、とても事に殺し給へと、たもとにすがり泣き叫べば殺すに難き事かとて、七首をぬいてあへなく首をうち落せば、此の首むかうにころびゆき、わがかたに向ひ、生けるときの顔色のごとく、につこと笑ひぬ、扱あるべき程のさたして野邊におくり葬る、其の夜よりして、身ほとほりて、股に一つの腫物出来、見るがうちに大きになり、ころせし女の顔に露たがはず髪を亂しかねぐるに笑へるさま、すさまじといふも餘あり、是れなん世に言ふ人面瘡なるべし、けづりすつれど、その日のうちに又出来て、少しも變らぬていなり、祈禱醫療さまざまにつくせども其の甲斐なし、今はすべきやうなく、次第に心氣つかれてつとめもなかはす、つかひをかへし、この所に引こみ二十歳餘になり侍り」とあつて、いよく人を殺した報いの恐しさがわかると同時に、いよく人面瘡は神變不可思議のものとなつた。

曲亭馬琴は、その物語のどれにも因果應報の理を濃厚に織り込ませた作者であるから、この人

面瘡の傳説も彼に見逃がされる筈はなく、果して、その「新累解脫物語」の中に、人面瘡の因果物語が極めて物凄く描かれて居る。『さて旭高く昇るころ、與右衛門まづ起き出て、門戸明はなち、竈焚つけんとする折しも苧績（妻の名）がいたく叫びしかば、うち驚きつゝ粗菜投捨て、いそしく走り行きて見るに、させることなし、あら不審などて驚かし給へると問ふに、苧績はみづから胸のあたりを撫おろし、なほ熟睡したるさく（娘の名）を指していふやう、わが身心もとなさに、今これが瘻を見侍れば、膝はますく、冬瓜のごとく腫わたりながら、悉く痂を結び、その容人の首に似たり、是見たまへとて、潛に衣を搔退くれば、けに目も口も備りて、髪ながやかに生えたるが、女の面影に異ならず、與右衛門あまりに淺ましくてつくつくとうちまもり、こは世にいふ人面瘡なるべし、われまづ法恩寺村に到りて、舅にしらし申さんに、御身よく留守し給へといひかけて直ちに清三郎が家に走りゆき、縁由を物語れば、清三郎夫婦大に驚き與右衛門と共に、慌しく羽生村に來にけり（中略）そのとき清三郎は孫が人面瘡を、と見かう見て、その妻にいへりけるは、御身何とか思ひたまふ、この瘡の面影は與右衛門が前妻なりし、殊難に似たるに非ずやと、いひも果てぬに、人面瘡は活る人のごとく、呵々とうち笑ひて、やをれ清三郎、われ汝にも恨なきにあらず、むかしわが夫、淫婦玉芝にこゝちまどひ

飽まで強顔しに堪かねて、遂にわが影を隠せるをしりながら、汝おめくと媒して、彼等に縁結ばせたるは、是いかなる心ぞや、汝もし親族の信を思はゞなどて一言は諫聞えざる、もと與左衛門は婿にして、八石目の田圃は、わが父の賜なるを、汝久しく管領せり、因て、一たびこの怨を復さんと思ひしかど、折を得ざれば二十餘年、徒らに過せしなり、見よ今汝が孫を惱し、又汝が女兒を苦しめ、いたく恥見せて後悉く殺さんとす、もしいふことあらば答ふべし、いかにやいかに……」

人面瘡がからくと打ち笑ふなどは少々極端であるけれどもどうせ嘘を書くなれば、これくらゐ徹底した方が讀むものにとつても痛快である。

いづれにしても、珍奇な疾病には、かうした因縁話が結びつけられ易いのであつて、良心の苛責を受けつゝあるものゝ眼に幽霊が見え易いと同じやうに、偶然に出来た腫物に、自分の殺したものの顔を認めるといふことは誠に無理もない話であつて、一旦人面であると認めた以上、それが、飯を食ひ、物を言ふと考へるのもまた當然のことである。

さて、たとひ人面瘡が人間の錯覺から起つたものであるとしても、何にも出来て居ないところに人面を認めるといふことはあり得ないことであるから、眼や鼻と見誤まれるやうな形状を持つた腫物が

實在して然るべきである。然らばさういふやうな腫物は何であるかといふに、恐らく膝關節の結核か又は大腿骨から出た肉腫ではなからうかと思はれる。「筆のすさび」の中には「城東材木町に一商あり年二十五六、膝下に一腫を生ず逐漸にして大に瘡口泛く開き、膿口三兩處、其の位置略人面に像る、瘡口時ありて澁痛し、満するに柴糖を以てすれば、其の痛み暫く退く、少選あつて再び痛むこと初のごとし、夫の人面の瘡は固より妄誕に渉る、然るにかくの如きの症、人面瘡と做す亦可ならん乎」とあつて、昔でも、心あるものは、錯覺に過ぎないことを説いて居るが、兎に角、眼や口や鼻の孔に見えるものが膿孔に外ならぬことは、この記事からも、明かに推定し得られるのである。

二

人面瘡と同じく人間の錯覺から起つた病氣に應聲蟲なるものがある、應聲蟲とは人間の腹に宿つてその人が物を考へたり或は談話するときに、その通りに聲を發する蟲のことをいふのであるが、もとよりそんな蟲はあらう筈はない。「古今醫統」を見ると、ある男がこの疾にかゝつたので、道士が、患者に本草の藥名を片つ端から言はしめると、蟲もその通りを喋舌つたが、藍のところでは蟲が黙つたの

で、さてはと思つて藍を煎じて飲ませると、やがて患者は一個の肉塊を吐き出した。見るとそれは長さ一寸餘りの人間の形をしたもので、その後はもはや腹で物を言はなくなつたさうである。

一寸餘りの人間の形をした蟲が寄生するなどといふことは信用出来ぬけれども「閑田次筆」には、應聲蟲のことを書いた序に「閑田言ふ、金蘭齋といふ老莊者、腹中より聲に應じて物言ふとおほえたり、されどもこれはたゞ、みづから覺ゆるのみにて他人きかず、暫の間にて止みたりと語られしと、馬杉享安といふ老人の話なりし、自らのみまきは病氣にてありけんかし」と述べてあるのは事實である。ヒステリーや偏執狂の患者は、物を考へて居るとき、屢々考へて居るとほりの言葉を體内で自覺するのであつて醫學上これを「有聲の考慮」と呼んで居るのである。

さて、人面瘡を巧みに因果應報に取りこんだ曲亭馬琴は、この應聲蟲をも種として「里見八犬傳」の中に、ある巨盜の罪狀を奇抜にもその腹が物語るやうに書いて居る。「かゝる積惡の報いなりけん、ある年の六月中浣に、業因（盜賊の名）は、京都なる祇園會を觀ばやとて、事なれたる小盜人三四名を從へて、各々形體を變へ、深草團扇などを賣る小經紀兒に打扮ちて、神會の本日京に赴き、人家の簷下にたゞすみて、種々の山鉾の渡るを觀つゝありけるに、怪しむべし業因が肚裏に聲ありて、忽然

として叫ぶこと、應聲蟲に異ならず、年來彼が做しゝ惡事を云々としやべる聲高やかにして、人の耳を申く可りに聞えしかば、業因は驚き慌てゝ、腹を壓し胸をうちて、禁めんと欲すれども、いよく高く罵りて、毫もやむときなかりしかば小盜人等も驚き呆れて、傍痛く思ふのみ、今さらにせん術を知らず。たうとうその聲が追捕使の耳に聞え、業因は召捕られてしまふのであつて、こゝにも馬琴一流の思ひ切つた書き方をうかゞふことが出来る。尤も、考證好きな馬琴は、應聲蟲とはちがつたものだといふために「そが中に博士ありて、詞徐に論すやう、應聲蟲といふ奇病は、その病人がものいへば腹内にも聲ありて、又その如くものいふのみ、則ちこれ響の音に應ずるに異ならず。その病人は默然たるに腹中に聲あるにはあらず。かゝれば但鳥業因が、腹内に聲ありしは、應聲蟲にあらざる也、是を怨靈の所爲といへるは據あるに似たれども、その推量の外を出す。只毒惡の冥罰にて然る奇病を得て、罪惡を自訴して誅戮せられし也。」と書いて居るけれど、やはり應聲蟲から思ひて附いてこの話を書いたことは疑ふ餘地がない。應聲蟲には人面瘡ほど因縁話が付き纏つて居なかつたけれど、馬琴がかうした因縁話を書いた以後には、或は應聲蟲も因果應報だと考へる者が出るやうになつたかもしれない。戲作者がいく加減の作りごとを書いて、それが傳説のもととなる例は昔から決して少くないの

である。

應聲蟲から聯想さるゝことは西洋ではゆる *ventrology* (腹話術) である。これは、自分が物を言ひ乍ら、自分より離れた物體から聲が出て居るやうに見せしめる術で、腹で物言やうに思はれるためにこの名があるのである。むかしエジプトでは僧侶がこの方法で神像から聲を發するやうに見せしめて「神託」を發したといはれて居るが、かういふことの出来る人間は、左程稀ではないらしい。ボオの探偵小説の一つに腹話術の巧みな男が、殺された者の死體を犯人の前に出現せしめ「貴様が犯人だ」と言はしめて犯人を驚かし遂に白狀させる話があるが、これを馬琴の「腹から自訴した話」と較べて見ると、頗る興味があると思ふ。

人面瘡といひ應聲蟲といひ、もはや今後の醫書には記載されぬ奇病であるが、現今何の奇もない疾病でも、何百年の後には或はまた荒唐無稽な傳説を持つに至るかもしれない。總て迷信といふものは人間に恐怖心の存在する限り永久に絶えぬものであつて、恐怖による錯覺が重なるに従つて、段々奇怪な傳説が讓されて行くのである。

不老不死靈藥ロマンス

一

平賀源内は、「そしり草」の中に、

「昔唐土に仙人と云ふ者有りて、限り無き齡を保ち、奇妙なる術をなしたるを、書に著はし畫に書きて翫ぶを見るに、或は鶴に乗りて空中を翔り、劍に乗りて海を渡り、鯉に乗つて瀧に登り、或は形を吹き出し、又は瓢箪に胸を出し、石を打ちて羊を出し、羅を切りて蝶とし、水を酒とする、其術奇なりといへども戲術に似たり。人是を學んで、或時は御咎あつて身を亡ほす。彼は狐狸の妖怪にして毛蟲の仙とや云はんか。云々」

と書いて居る。誠に、折角、貴重な生命を延ばしても、鶴に乗つたり、鯉と共に瀧のほりをしたりするだけでは、延ばした甲斐は更になく、長生は考へ問題である。

けれど、昔から不老長生法や、若返り法の發見に浮き身を饜した連中は、命を延したあけくのことや、若返つてから先のことなど考へないで、たゞもう命がのびればよい、若返りが出来ればよいと思つて力を注いだらしいのである。

無暗に搜し求めたのであるから碌なものは求められないにきまつて居る。エールリツヒが微毒の治療藥サルヴルサンを搜し當てたやうに、理詰めで研究していつたのではないから、いゝものは手に入らぬ譯である。その證據に昔から今まで一人も不老不死になつたものがないのではないか。秦の始皇帝は萬里の長城を築いたり阿房宮を作つたりして、氣の弱い人間の度膽を抜いたが、不老不死藥の搜索だけは失敗に終つた。彼は道士徐福を遣はして東海に不老不死の藥を求めしめ、自らも舟を江淮に泛べ、南郡に至つて秦に歸つたさうだが、徐福はとんでもない所へ漂着して、藥のことは有耶無耶になつてしまつた。

來は來ても話相手のない徐福

と川柳子はいふ。なる程、言葉が通じなくては、不老藥發見も覺束なかつた譯である。

二

然し何事にも理窟をつけたがる支那人は、仙術はなくてはならぬと考へて、仙藥について色々研究した。抱朴子論僊卷に、「或人問うて曰く、神僊不死、信に得べけんやと。抱朴子答へて曰く、至明ありと雖も、形ある者、ことごとく見るべからず、極聰を禀くと雖も、聲ある者、ことごとく聞くべからず、禹益齊諸の知ありと雖も、嘗て識る所のもの、未だ識らざる所の衆に若かざる也。萬物芸々たり何の有らざる所あらんや。況や列僊の人竹素に盈つ、不死の道いづくんぞこれ無からん」とある。これ位理窟が言へるのであるから、不老不死の法だつて理詰めで出來あがらせて見ようと、隨分骨を折つたらしいが、抱朴子の著者葛洪の作り出した仙藥は丹即ち水銀化合物に外ならなかつた。水銀化合物なら微毒には效があるけれど、「不死」の效があらうとは思はれぬ、思はれぬどころか、反對に「死」の效があるのである。尤も葛洪が丹を尊しとしたのは、金を採取するになくてならぬ物質であるからで、その實金が不老藥だといふのであるが、いづれにしても探し當てた不老藥は、その大法螺に似合はず見すほらしいものである。それを辯解するためかどうかは知らぬが、葛洪はまた、「仙の要は忠孝

和順に、信を以て本とすべし、君徳を修めずして仙法術を務むるは長生する事を得ず」と言つて居るが、條件がついて来るやうぢや、そろ／＼逃げ腰だといふことがわかる。逃げ腰であたりまへの事、葛洪死んで今に至る二千年ばかり。尤も葛洪自身は長生きしたくなかつたかもしれぬが……

三

あれか、これかと色々探し求めた結果は、相當に複雑な仙薬も出来上つた。玉函方王子喬が術に曰く……などといふと大袈裟だが、王子喬の處方した仙薬は、三月に甘菊の苗を採り、六月に葉を採り九月に花を採り、十二月に根莖を採るのだが、いづれも採取の日は上寅の日を選ばなくてはならない。それからこの四つものを陰乾にして、同じ分量宛を一しよにして、戌の日を選んで、臼でもつて、千べんつくのである。次にその粉を酒を以て、一杯宛のむか、又は蜜で丸めて梧子の大きにしたものを七粒づつ、一日に三回のむかするのである。さうすると百日目には身體が何となくすこやかになつて來、一年目には白髪が黒くなり、二年目には抜けた齒が生えて來、五年目には八十歳の老翁が兒童に變るといふのである、五年以上續けたらどうなるか書いてないが二十年も續けたら、胎兒になり更

に三十年も續けたら精蟲と卵子とにわかれるかもしれぬ。あたらしい人間を精蟲と卵子に還元するやうぢや、仙術にもうつかかり手が出せない。

淮南王といふえらい人は、道を好んで天下の士を歓迎した。あるとき八公といつて八人の道士が王の門を叩いた。どれも皆眉まで白い老人たちであつたので、王は召使ひのものに、自分は延年の術を求めて居るのだと告げしめた。すると八人もその場で兒童に變じてしまつた。そこで王は八人のものを歓迎して招じ入れると、いつの間にかもとの白髪の老人に變つて居た。王はその靈妙なる力に推服して、朝夕教を受けることになり、道士たちは王に丹經を傳授した。ところがある日王の身が危ふくなつて來たので八公は王とともに白日に昇天してしまつた。するとその後庭にこぼれて居た仙薬を舐めたものは鶏でも犬でも皆昇天してしまつて、後には雲の中で鶏の鳴き聲や犬の吠える音が聞えた。

四

ギリシヤ神話の中には妖女メヂアの若返り法が書かれてある。この方法もやつぱり中々こみ入つて居る。彼女は先づ、満月と星とへカチーとテルスに向つて呪文をとへ、それから龍に乗つて空中を

駈けて行き、彼女以外には誰も知らぬ土地へ行き、九夜の間生あるものと交りを断つて、藥草をさがす。その藥草を手に入れて歸つて來ると、二個の聖壇を作り、一つはヘカチーを、も一つはヘビーを祀り、黒羊を犠牲として、牛乳と葡萄酒をまぜた神酒をそなへる。それから彼女は若返りを施さうとする老人の壽命の長からんことを幽王の府プルートーとその妃に祈願する。それがすむと老人を呼び出し、藥草の寢床に横はらせ深く眠らせる。次で彼女は髪を解き、木の枝に火をつけて三たび聖壇の周圍をまはり、その枝を犠牲の血液の中につけて、その上で燃えさせる。それと同時に彼女は鍋の中で魔藥を煮る。どん、成分かといふに、澁い汁の花と種子をつけた魔草、東洋の遠隔の地から取つて來た石、四方の海岸から取つた砂、月夜に集めた霜、金切聲を出す梟の頭と翼、狼の腸、龜の甲、牡鹿の肝臓、人間の七代を経た鳥の頭と嘴、その他なほ色々のものである。これ等のものを枯れたオリヅの枝でかきまはして、それを取り出すと、オリヅには芽が生じ、又、煮汁の飛び散つた所に、綠草が萌え出した。

魔藥の用意が出來ると、彼女は老人の咽喉を切つて血をしほり、口の中と傷の中へ、その魔藥を流しこむ。魔藥が老人の身體にしみ込むが早いか白髪は黒くなり、皮膚の色は紅くなり、老人は四十歳

若くなつた。

いやどうも四十歳若返るにも容易なことでない。それにしても、鶏が昇天したり、枯木に芽が出たりしては、不老長生法など無い方が結局氣樂でよいかもれない。

五

五雜俎に千年の人蔘の根は人の形となり、千歳の枸杞の形は狗の形をなす、中夜の時出でて遊戯す、煮て是を食へば必ず地仙となる、然れども二物まことに逢ひ難しとある。折角遊んで居るところを捕へて來て食ふなど、随分残酷な話だが、滅多に遊ばないといふのだから、中々手にははひり難い。けれどもたまには手に入れることも出來ると見えて、こんな話がある。

維楊といふ所に一人の老人道士があつた。いつも他所で御馳走になつて來るので、その返禮にある日それ等の人を招いて御馳走をした。この事を聞いた乞食たちは盤を持つて集つて來た。いよく御馳走が出て、客たちが見ると、小兒と犬とを蒸したものだつたので、客は皆けーく言つて食はず、老人が何といつて勸めても、皆は手を觸れなかつた。そこで老人は嘆息をして、一人でたつぷくり食ひ、

そのあまりを乞食たちにやつた。それから老人は客に向つて只今差上げたのは千歳の人蔘と枸杞で、容易に手に入るものでない。これを食べれば白日天に昇ることが出来るのである。今迄御恩になつたから、御禮の爲にこの珍味を差上げたのに食つて下さらぬは残念だ。いや仙方といふものは中々難しい物だと語つた。その言葉が終るか終らぬに、老人は、令童玉女となつて乞食たちを連れて、ひらりと天に昇つた。いや乞食はとんだ幸運にありついたのである。

西洋では鳳凰フエニラックスの迷信が昔、一般に行はれた。この鳥は世界にたつた一羽しか居らぬのであつて、何百年の間か生きて居て、最後に、われと我が身に火をつけて焼死すると、その灰の中から、次代の鳳凰が生れるといふのである。この鳥を手に入れて薬を作ると、不老不死になるといふのであるが、一たい何處に居て何をして居るかかわからぬので、捕へようと思つたとてつかまるものではない。

六

人間の血液が萬病に效があり、従つて不老不死の妙薬となるといふ迷信は、西洋では随分古くから存在した。同じ血液でも、善人の血液では效がうすく、罪人の血液がよい。又とりたての暖かい血の

方が、冷えた血よりもよいといふので、若返りたい連中は、罪人が死刑に處せられる度毎に、刑場の附近を取りまいて、高い金を拂つて血液を買ひ、その場がぶく／＼飲むものさへある。だから時には白髪だらけの皺くちや婆が、齒の抜けた齒齦を眞紅に染めて、にやり／＼と笑つて歸つて行くといふ「安達ヶ原」を思はせるやうな光景も見られるさうである。時には買つた血よりも盗んだ血の方が有効であるとして、深夜刑場へ、こつそり盗みに来る連中が少くない。尤もこれはいふ迄もなくドイツとかフランスとか、死刑方法として斬首を選んで居る國でなければ見られぬのであるが、つい近頃までドイツでは暖かい血一オンスが五十マルクといふ相場であつた。五十マルクで若返れるなら誠に安價なものであるが、最近の科學の立場から言へば、五十マルクの牛肉でも食べた方が遙に效があるやうに思はれる。

罪人の血液を買ふのは、まあ罪がないとして、人の血液がほしいために、わざ／＼人を殺すなどに至つては、容易ならぬことである。第十五世紀の終りから第十六世紀のはじめにかけて俗に血伯爵夫人と呼ばれたハンガリーのネグスチー伯爵夫人は、従者たちと共謀して、約六百人の少女を城内に連れこんで来て殺し、その血を搾つて、風呂を建て、心地よささうに入浴して若返りを實行したといふ

ことである。明治の宰相某閣下の愛妾は牛乳の風呂をたて、若さを保たうとしたと傳聞して居るがまさか血の風呂をたて、見ようとは思つても見なかつたであらう。

七

どんな面倒な方法を講じたところが、又どんな物凄い手段を取つたところが、結局人間は不老不死になることも若返ることも出来ないのである。けれど何事にも未練の多い人間は、どうしても思ひ切る事が出来ず、はては却つて、無限の富と、無限の壽とを並用しようとするやうな大それた欲心を起し、西洋ではことに中世の暗黒時代に所謂鍊金術なるものが盛んに行はれたのである。

鍊金術なるものはエジプト人の金屬の染色法がその起原になつて居るのであるが、慾の深いアラビヤ人の手に移つてから、卑金を黄金にかへる術になり、卑金を黄金にするには「賢者の石」を手に入ればよいと思ひこんで、人々は随分苦勞して探し求めたのである。卑金を黄金にする位力のあるものなら不老不死の效もあるだらうと考へ人々は愈々益々力を入れて研究したのであるが、誰一人賢者の石を手に入れたものはなかつた。然し中世紀の優れた學者たちは、まるで賢者の石を手に入れた

やうな風を装つた。レーモンド・ラリーは賢者の石が金剛石に似て居るといひ、バラセルズスはルビーに似た所があるといひ、ペリガール・ド・ピサは、熱した鹽の香氣を持つた野生の罌粟に似た所があるといひ、ファン・ヘルモントは硝子のやうな艶をしたサフランのやうなものだなどと言ひふらしたものである。何とかして探し出したいと人々はあせつたのである。グラウベルといふ男は、汗水たらして之を探した結果、芒硝を捜し當てたが、芒硝を捜し當てるなどはまだ運のいゝ方で、大ていの鍊金術師は草臥を儲けたゞけであつた。中には二年も三年も鉛をどしどし使つて、あけくの果に實驗室が爆發焼失し、金の代りに灰がとれたといふやうなこともあつた。エリアス・アシユモールといふ第十七世紀の占星學者は、その日記の中に、養父からその死に際に賢者の石の祕密を傳授された旨を書いて居るが、その著の中には、わざと、賢者の石の祕密だけは發表出来ないといつて居る。發表するだけのことがないのである。

八

どうせ他人に言へない祕密なら、賢者の石を捜し當てないでも捜し當てたといつて居たはうが、人

聞きがよいとでも思つたか、西洋中世には賢者の石又は不老不死薬を發見したと自稱する人間が相當に澤山あつた。アルベルツス・マグヌス、サン・ゼルマン伯、カリオストロ伯、ジョン・デューなどが是である。アルベルツス・マグヌスは別として、あとの三人は歐洲を跨にして歩き廻り、大法螺を吹きまくつて、詐欺瞞着、勝手放題なことをしたのである。

獨逸皇帝ルドルフ二世は最も大なる鍊金術のバトロンであつて、帝の財産の大部分は、賢者の石や不老長生薬發見のために費されたのである。ブラーグに於ける帝の宮殿の室々には、いつも鍊金術者や占星術者が一ぱい詰めかけて居た。前記ジョン・デューは助手のエドワード・ケリーをつれて、この伏魔殿に来て、帝に逢ひ、鍊金術を實地に御目にかけると申出た。そこで帝のゆるしを得て、早速實驗に取りかゝつたが、その實、帝を催眠術にかけて、まんまと欺いたのである。そして澤山の報酬を貰つて、化の皮の現れぬうちに、デューは首尾よく英國に逃れたが、助手のケリーはボヘミアの地主となつて居たため、後に詐欺だといふことがわかつて、帝のために殺された。

サン・ゼルマン伯の如きは自ら、齡二千歳であると豪語して、歐州各國の人々を煙にまいて歩いたのである。フレデリック大王なども、やはりその煙にまかれた一人で、大王はいつも、人々に次のやう

な逸話を語つた。

ある人がサン・ゼルマン伯に向つて、

「あなたは二千歳だといふことですが、それではキリストを見られましたでせう？」

ときくと、伯は、

「えゝ、よく話をしましたよ、大へんやさしい男でした。然し宮の事件のあつた時分から逢はなくなりましたよ。」

と眞面目くさつて言ふので、その人は傍の従者に向ひ、

「あれは本當のことですか？」ときくと、その従者も、

「そりや、本當かどうか私は存じません。私がかへるやうになつてからは、まだたつた三百年ですもの。」と答へた。いやどうもえらい男たちがあつたものである。

だから、この男の持つて居た不老長生薬は非常に效力があつて、ある老婆がそれを貰つてのんだらとめどなく若くなつてしまつて、たうとう胎兒になつたといふことである。これは私の作り話ではなく、ランベルグ伯の日記に立派に書かれてある。尤もランベルグ伯もその胎兒になつた老婆を直接

見たのではなからうと思ふが。

カリオストロ伯もこのサン・ゼルマン伯に劣らぬ大詐欺師で賢者の石を発見したと吹聴してあるいたが自身は五十二歳で死んだ。

九

薬ではとても效を擧げることが出来ぬからと思つたかどうかはわからぬが、昔から若返りの法として、處女をそばに置いて、性交をしないで暮すことが西洋で度々行はれた。このことは舊約聖書にも書かれてあるが、ギリシヤ、ローマ時代には盛んに行はれたものである。當時それを人々は處女回生術と呼んだ。處女回生術があるなら、老婆のために處男(の)回生術があつてもよかりさうだと思ふ人があるかもしれぬけれど、さうしたことがあつたことを、まだ私は聞いて居ない。多分女といふものが今の西洋とちがつてギリシヤ、ローマ時代に、男よりも卑しく思はれて居たのがその原因であるかもしれない。

餘談はとに角、この處女回生術は近代に至る迄有效であると認められ、第十八世紀の和蘭の名醫

ボニールハーフェは、アムステルダム市長に、若返り法として二人の處女の間で寝るやうに勧めた。フーランドも若い乙女の氣息は純潔新鮮な生命の活力を持つて居ると説いて居る。キャンベルといふ醫師も、このことについて一書を公にし、いゝ加減の出鱈目を書いたら、それを讀んだある醫師はわざ／＼女子の寄宿舎にねとまりするやうになつた。女學校の先生たちは大に意を強うして可なりである。

ブローン・セカールの畢丸乳劑注射、スタイナツハの若返り法、メツチニコフの乳酸菌服用などいづれも科學的に考案された不老長生法であつて、これに關するロマンスといふやうなものは澤山ない。現今の人心が多少懷疑的になつて來て居るからであらう。それにしても以上述べて來た如く、不老藥発見さわぎは結局空なものであることを思ふと、うたゝ慨歎にたへぬものがある。自分の力で勝手に生れて來ることが出来ぬ以上、生命を延長することも人間にとつては不可能なことであるのだらう。

學者氣質終

大正十五年六月十五日印刷
大正十五年六月十八日發行

學者氣質

(定價金貳圓貳拾錢)

著作者 小酒井光次

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行著 和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷者 佐藤駒次郎

東京市本郷區眞砂區三十六番地

印刷所 日東印刷株式會社

印檢者作著



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話大手五・四二一〇)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

小 酒 井 不 木 氏 著

◎強盜殺人類々こし起る。直に繙き給へ

近代犯罪研究

四六新製
總價 圓 拾 八 錢
定價 圓 拾 八 錢
送料 八 錢

性的犯罪、硫酸投注、不具と犯罪、犯罪者のシエーキル・ハイド性、主権者殺し、變態心理と犯罪、自白の心理、自殺の心理、竊盜心理、詐欺と婦人、犯罪心理と婦人、迷信による婦人の犯罪、冤罪に苦んだ東西の女性、日本最近の犯罪等。

科學探偵

四六新製
洋裝美本型
定價 圓 拾 八 錢
送料 八 錢

事實は小説よりも奇である。最近の科學が犯罪探偵に一新生面を開いたことは争はれぬ事である。殊に犯人逮捕の際に無線電信や寫眞電送がどれ程利益を與へたか。千に一つの大犯罪と探偵の實例を記述し、併せて探偵方法の變遷史を説く。

525
302

終